明治三十一年十一月十四日

女學雜誌

第四百七十五號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十五號目次

◎社說
閨閥は女學の敵
佳人晚婚の恨
天長節の雨

◎家庭
多くの事に心勞せり
陸奥錦木塚（蕉雨）
小兒の智慧（長汀）
兒童研究の近情
料理の談

◎文藝
女性の俳諧（曲浦釣夫）

◎史傳
ワシントンの父とゲーテの父

◎雜錄
群馬縣の公娼廢止
亡友笛のあと　信夫ささ子
美のいろ／＼（日本繪畫共進會、白馬會展覽會。裸体畫を見ろ、水ぐしろ、淺草區泉一座の奏樂　ユンケル氏と幸田孃の合奏　美術家とは何ぞや）
富士の峯（新詠詩）　花影子

◎時文
文界雜評　なにがし
（基督教的文學思想）基督教界の新聞雜誌（◎日本基督教徒の文學（万朝報の賣れる理由）◎東京と大阪との文學の性質を論ず（毎日新聞の新詩）◎澀氏の英文典摘要　俳諧木太刀（高島秋帆）◎日の出島◎累卵の東洋（染港新聞）

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするが旨とす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價　拾錢 半年分定價　壹圓拾錢 一年分定價　貳圓 （內國無郵稅） 代金は總て前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事	
廣告料	一行（廿七字詰）一回　前金拾錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引	
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし尤も郵便切手にて送らるゝ人は總へて一割增にて計算せられたし	

明治三十一年十一月九日印刷
明治三十一年十一月十日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

櫻井成明譯　腓立比物語　正價金二十八錢　郵稅金六錢

横山雅男著　婚姻論　正價金十二錢　郵稅金四錢

池袋清風著　淺瀨の波　第一篇二冊、第二篇同　正價二十八錢　郵稅一篇各々六錢

◎前號第四百七十四號十月廿五日發行要目
社說 御信任論◎君侯のお爲と勤王家◎官撰解熱藥◎隨感五則◎女學 女性の兩面◎女學生の雜誌◎女子の犯罪（靜淵居士）◎評論 北米民主共和政の末路（青柳猛）◎教育 教育會の新機運（曲浦釣夫）◎雜錄 美神の聲影◎有美 亡弟の寫眞に嘆す（おうそむ）◎時文 時文雜評數件◎

巖本善治著　我黨の女子教育　正價金十錢　郵稅金二錢

故鈴木弘恭述　百人一首講義　正價金二十八錢　郵稅金四錢

同　文法口授　正價金十二錢　郵稅金二錢

大賣捌　京橋區釆女町　警醒社

女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百七拾五號

明治三十一年十一月十日發兌

社説

閨閥は女學の敵

閨閥とは閨門の閥なり細君の縁邊に電信を掛け其の血すじに仲間を結び倚つて以て立身の土臺となす之を閨閥の工夫となす今や藩閥は輕んぜられ黨閥は疎んぜらるゝ世の中に獨り閨閥のみ彌よ流行せんとするの兆あるは倘ほ現に之が實益ありて當世風の才子連りに賞美すればならん左れど本來は苦々しき事にて古しへの大丈夫が斷じて爲ざりし所ろなるを反つて今の文明學人が恬として恥ぢざるは如何の譯ぞ昔しは釣合わぬ縁を燈灯とつり鐘に喩え其末は不縁の非を兆しめたるが扨て其の釣合はぬとは如何なるとぞと言ふに例せば浪人者が家老の娘を貰ひ受くるが如き場合を言ふなり之に反し嫁は身代の下なる家より迎ふ可きものと定めお里が惡るければ自然に辛棒も仕易く我儘も出ぬものと見込みて惣べて一段下の家の娘をこそ所望するものと定まり居たるに當代の才子は全然之と正反對にて妻は必らず財産あり官位あり身分ある人の娘を擇びもしも我が立身の助けとなる先輩上官の血統ならば其の養女にても姪女にても忝けなしと渇仰する爲躰世は不思儀にも開化したるものなり試みに帝國大學をもて一例とせん此の大學は學文の淵叢と稱し日本第一の學者の集まり居る所ろと評判すればなり然るに其の卒業生が赤門を出でゝ金ボタンの洋服を脱がんずる最初の理想の一は速かに閨閥の緣しに取つき願くは何々爵又は何々紳商と言わるゝほどのお流れに預りたしと懇望するにありとぞ大學既に然りとせば他の學風は概むね推察すべし情けなき氣概と云ふべし扨て閨閥のお蔭を恃とみ天降りの娘を頂戴し恐懼再拜して首尾よく結婚したるの曉き伉儷のかたらい如何んと見るに妻が持參金によつて我が負債を返却し妻が力にて出來たる土藏つきの家に跼蹐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

として住ひ妻が連れて來たるお附にまで遠慮し出入りに心配し小遣錢を明白にし苟くも嫉妬の懸念あらしめぬよう戰々恐々たるの趣むき男子の意氣地屹度もなし斯る輩は其の朋友に對してすら赤面至極の事なるべしと想像せらるゝに朋友も亦同類なれば中々赤面の次第にはあらず彼等相ひ付へばカット氣をゆるし互ひに辛苦經營を白狀して同もに世のあぢきなきを恨むの外あらず此に於てか彼等相伴なつて別に隱さみの場所をつくり初めて大陽氣の遊山を爲し互ひに秘して其の家に告げず初めは友人同行と見做して安心せし門閥の夫人も遂には氣付き今後は何事務とは御一應に交際ある可らずと禁せらるなど往々有りがちの事なり斯は妻側の宴付に出でゝ初對面の客に挨拶するすら二の次には其の妻の親類をほのめかし之によりて他のお世辭を買はんとす大甚しきは我妻は何々大勳位の落し種なりと言つて恥ぢざるものもありと云ふ咄吐するも何け堪へざる次第にあらずや凡そ斯の如き依例に隨わしき交わりとては斷じてある可らず何んとなれば男子に男子らしき保護者の氣前なく勇氣ある愛情もなし妻に從順なる器しみなく床しき情愛もなし而して其の間だの睦わしからんとを求めんに安くんか得ん元來利を以て合し我儘を以て合したる仲なれば末の不吉ならんと鏡にかけて見る如し誰か其の不緣を怪しまんや左るにても氣の毒なるは門閥に天降りせし其の娘當人なり其人の親切も心より出づるにあらず其の謹直も何日迄かつゞかん若しや我父の官位爵祿に不運の事あるか或ひは父母百年の後に至れば元來父の威光によつて利益せんとせし輕薄男子の心術に變動あらんとは當然の數なり左なきだに變わり易しと云ふ男子の心に初めより變わるべき資格を見込み作ら百年の身を托するとは何事ぞや思はざるも亦た甚しと云ふべし或人の説に君等女學に心がけて女の何にしろ優待せらるゝとを期望せらるゝ以上は門閥の婦人を夫が大切にする殊勝の風儀にて寧ろ可ならずや東洋風の我儘男子の所置に比べては或いは佳けん彼の夫婦相敬する新風儀を造り出すは寧しろ此變則の元因より來らするも亦た一法ならずやと言ふものあり此れ俗論にして素より取るに足らず若しも世上の男子に殊勝の心掛ありて女を撰ぶに其の學と其の德とを標準にするようならば天下の女子競つて其の品德を修め女風之より改まり女學之より起るべきに悲しい哉今の男子は前述せ

る卑屈根性にて初めより此樣なる心掛もなく只但閨閥の娘ならば其徳も學も問ふ所にあらず希はくは容貌丈けだに美ならんを願ふ然し乍ら夫も倘ほ勘辨すべし丘父は是非とも高官權家にてあらまほしと只管ら閨閥をのみ主とするが故に閨閥の娘子未だ曾て其の徳と學との婚嫁に必需なるを思はず只生れて閥あることを誇つて單に容貌を飾るの外遂に覺ることあらず女學の無みせらるゝことも亦た甚はだしからずや故に閨閥は女學の敵なり閨閥重んぜらるゝ間だは女學輕んぜらる憫れむべし天下の才子閨閥の奴となりて女學の佳人空しく薄緣に泣く佳人恨らむべし女學歎くべし滔々たる男子今の如く淺ましくば窈窕たる淑女は夫れ誰にか嫁がん男子の好尙速やかに一變せざれば女學も遂に其の報ひなきに泣かんとするのみ。

天長節の雨

九重ににほへる菊の白露は
こぼれて今日の雨となりけむ

湯谷磋一

佳人晩婚の恨

丈夫の恨は知己を得て其の所學を施すことを得ざるにあり、佳人の歎きは我を愛するものを得て其の終生を托することを得ざるにあり。近年の男子卑屈にして心掛宜しからず、知己を得て抱負を實行するの覺悟もなくして、只管ら裏門の出入を工夫し、妙に奔走して下品の出世を耻とせず。夫れ、自分の覺悟する所ろ既に斯の如くなれば、他人の我に對するの扱かひも亦た之に類せんことを所望し、苟しくも見識を備へたる獨立の人を面白しとせず、只だ圭角なくして我に快ちよからんことをのみ專一とするなり。彼等が其の妻を擇むに至つて殊に此の趣味を露はす。凛然として我に万一の益あらん如き內助を求むるにはあらず、賢明にして子孫に百年の敎訓たらん如き妻を求むるにもあらず、只だ調寶にして面白く、美しくして弄そび易く、娶とつて何かの利益となる緣邊の娘子をのみ探求せんとす。日本男子の理想も亦た下落せる哉。

知らず長恨の佳人幾何ありや。其の學は當代第一流の女學を了り、其の識見は古今東西の婦人を洞觀し、胸に濃やかなる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

愛情を遁へて、高潔なる室家の理想を夢圖せる身にて、世上男子の輕薄大率ね斯の如く、遂に其の貞操を托せんほどの良縁を得ざるに於ては、秋夜の長きを恨み、冬夜の冷たき衾、はた何れの夜にか好夢を結ばん。年々花落ちて、鳥空しく去來し、歳月早く去つて、年齒の漸やく高きを覺ゆ。二十の坂を夙に越して、三十の坂に近づき、同窓多くは雙々の伉儷となりて我のみ依然として隻影を作とするは、さすがに女の心地として巾幗き感にはなかるべし。

若し夫れ西洋の諸國、就中北亞米利加の邊りにては、年老けて獨り住ひ、館に據りて頭べに紅きを挿はさむ老孃の數少なからず。其の數多ければ其の勢ひも盛んにして、絶へて侮するの體なし。仲間同志相ひ慰さめて時に氣焔を吐き、沈氣容易に當る可らず、賣れ殘りの貧相に、世を怨んで人をはかなむ如き景色は付ておらずと云へり。之れ其の同類の多くして歷史の久しければなり。我國の事情は全たく之に反し、二十を越へて尚ほ緣なければ、賣殘りと稱し、何事か曰はくのあるものと言ひ做し、世上の評判極めて宜しからぬ習慣なれば、親兄弟は何よりも先づ契約の早からんとを希望し、遅うして完全ならんよりは寧ろ拙速を尊ぶと云へり。世上從來の習慣斯の如くして、通常の人氣大抵此の標準に由るとなれば、苟しくも破格の理想を守つて、年長くる迄で容易に承知せざる晩婚の孃子は、其の家庭にすら同情の人少なし、况して近邊緣類の批判に於てをや。四面の楚歌皆な吾に通ぜざるものあるべし。憫れむべし此般の孃子、獨り理想の城に立こもりて外援の味方もなく、秋夕、孤窓より空しく眺めて鳥の自由に飛びかけるを羨ましくや思ふらん、眞とに氣の毒なることとなり。

茲に此般可憐の孃子に告ぐ、汝が理想にして若し人間以上の事を求むるとせば須からく斷念すへし、斯の如き理想は俗世間に於て滿足するの望み到底あるまじければ也。左れど、大和には大丈夫、澤にあり、たとひ浮薄なるが當代の流行なりとも此の流行に憤慨する男子も亦た尠なからず、凡そ世に惡弊あるときは、弊を救はんとするの反動必らず存するものにて、之なき時は即はち國亡ぶるものなれば、滔々たる神洲、日東日の出の吾國に於ては、現時の形勢未だなか〳〵に左程の悲境にはあらず、軟骨男子の多き割合に、硬骨男子も

あり、閨閤に隨行する才子の多きと同もに、媚粧の娘を擇まんとするものもあり、新日本の男兒は、未だ海月と海鼠とのみにあらず。

左れば、晩婚の婦女子、偏えに其の緣しの遅きに泣くなかれ、寧しろ其の品格と德操との成就せざるに泣け。今の心ある男兒が室を成すや遅し、如此き男兒が其の伉儷をつくるや、女子の年老りたるを恨まずして、德の長ぜざるを歎くべし。

左れば、鏡に向ふて鬢髮の光澤を氣にせんよりは、寧しろ道に對して才德の光りなきを惜しみ、氣品を容色に顯はし、德操を衣裳に彩どり、婚期後るゝにつれて、風采愈よ熟し、以て彼の高潔なる男兒の理想に適合するに堪へよ。

古しえより、仙骨童顏ありと傳ふ。慾うすく、邪氣少なき人は老衰するとの極めて遅きものなり。彼の晩婚の孃子、理想を高くして、心志を潔よくせば、其胸中常に鮮やかにして、風氣太はだ若々しからん。たとひ裳の紅きを廢め、飾りの麗わしきを棄つるとも、尙ほ楚々として香わしからんに、我ながら緣の遠きを怨み、同輩の片付の早きを嫉ねみ、如何にもして早く其人を得なんと焦るとは、喩えば獵官の人の運りに運動するが如くならんには、其の飾り麗々しく、其彩どり赤々しく、其のつくろひ艶々しくして、而も其の精神たるべき風骨品彩は衰然として老ひたり、たとひ白粉の層を厚くすとも額ひと唇との筋自から深げに見へて遂に其の老年を隱しがたし。苟しくも、肝腎の風采に於て衰ろへ、わざと其の裝はひを若々しくして、漸やく以て其の老を隱さんとするに至ては、白粉の影自から暗く、紅脂の色自から嫌味あり、之を兎の花簪したるに喩ふ。心ある男兒の感服せざる所ろ也。

左れば、晩婚の婦女には、其の年の老するを恨まずして、德の成らざるを惜しみ、靜かに天運の來るを待つて、神の合わせ玉ふ緣しを恃こみ、品德是れ最上の粧飾たることを覺悟して誤まつて輕薄男子の好尙を迎ふる如き俗事に倣ふ勿れ。抑そも晩婚の婦女子を歡迎するの男子は即わちなみ〳〵の輕薄人にあらざるが故也。

棧橋や蠅も居直る笠のうへ

春風や煙管くわへて船頭殿

家庭

多くの事に心労せり

むかし聖主行がたき道を傳え、到る處ろ、心の病めるものを愈やし玉ふ。一日、マルタ、マリアの家に入りて説法し玉ふ時、姉のマルタは主の降來を光栄として馳走に忙はしく、聞來集の人々を世話して、寸暇も落付かず、目の廻るほどに奔走せり。妹のマリアは之に気のつかぬ躰にて、毫しも顧りみず、静かに主の御足の下に坐して、専念して教へを聞けり。姉は此の躰に腹立しくやありけん、突如、妹を引張らんとして且つ主に訴へて曰ふよふ、主よ我妹に命じて少しは妾の手助けせよと叱らせ玉へ、妾たゞひとり斯く迄に世話しきものをと。聖主此に於て憐れませて曰はく、マルタよ、マルタよ、汝は多くの事により心労せり、左れど聞け、無くてならぬものは唯一つ、妹こそ佳き方を撰びたれ、汝何んぞ徒らに多岐の煩悩に迷ふやと。

真とに是れ男女世に立ちての総ての教訓なり。人事複雑にして、其端緒数へがたく、日々些細の務め続々往來して、人の一生を成す。之に気付き、彼に注意し、四方八面に玲瓏たる心術を抱きてすら、尚ほ落度のみ多からんとする世の中に、茫然自失の躰にて此の活世界を過ごさるべけんやとは、世故に経験ある人のつね／＼申し聞ける所ろなり。真とや、人間の躰、五臓六腑の節組なるものゝみにはあらず、幾万の血筋、何百万の毛穴さへありて、時々刻々の働らきを為すものを、人の霊性たる其の心の働らきぶりは、更に複雑、更に霊妙ならんと常にあるべきの理なり。左れば、幾万の血筋、何百万の毛穴の、一つの連接せる皮膚にて包まれずば、生存の甲斐なき如く、人世複雑、人心霊妙の働らきも、所詮は一以て之に徹底するの極意なかりせば、人はたゞ忙むしきのみにて遂に何の成就する所ろもなからん也。聖主曰く、無くてならぬものは唯一つと。孔夫子曰く、唯一、以て之を貫ぬくと。蓋し其の心術を言ふ也。試ろみに、國を治むるの道に就いて之を説かんにも、亦之に同じ。政治いよ／＼緻密にして、其の器關ます／＼複雑なる

とも、國政大本の由て立つ所ろは至つて簡短にて、其の大綱は、東西古今左して變わりあるとなし。在上の人誤まつて此の大綱を立てずんば、小規百たび震ふとも功德あるなし。故に、政治は甚はだ複雜の如くなれども、其の大本は極めて簡易なり。衆を治むるは猶は寡を治むるが如しと言へるは即ち此の消息を敎へたるならん。

左れば、家庭に主婦となりて、親から八省の大臣を兼ね、神棚より臺所に至り、夜わけより深更に及ぶ迄で、千百萬億の些細の出來事を一々直裁し、下男下女をなつけ、出入小方を悅服せしめ、親類緣者に指をさゝせず、世上の評判迄で宜しくせんとの責任は、多忙此上に過るものはあらず。主婦の一身は八面六臂を備ふるとも尙ほ足らず、手八町口十六町に達するとも尙ほ餘まれりとは言ひがたし。此を以て家政の工夫は女子の一大事にして、姑も、母も、女學校も、女鑑も、敎訓する所ろ、千百にして盡きず、當人の心得も亦た萬々の限りなきとなるべしと雖ども、若し彼女にして最後最底に無くてならぬ唯一つの緊要至極のものを欠くとあらば、たとい他に如何ほどに心勞し、如何程に氣をつけ、如何ほどに上手

に仕了せたりとも、遂に肝腎の目的を達するとはあるまじきなり。

凡そ何事の藝能にても、其の入口は如何にも複雜にて、其の進路は層々段々の違ひあり、古人岐路の多きに泣きけん如く其の要領の得がたくして、其盡力の甲斐なきに失望するともあらんかなれども、更に究極して其の堂に達すれば、彼の複雜と見たるは、入口の徑にて、何れより進むも遂には同じかりけるとを發見し、其の幾たびか工夫せし樣々の手段は、所詮無用の徒勞にして、遂に一大事の唯一つなるものを得ざれば何の効もなかりしとを覺悟するに至らん也。むかし、宮本無藏は兩刀を使へり、其の劍道一世に冠絕したり。然るに彼れ晩年に及びて飜然として悟りけらく、嗚呼、我遂に何の徒勞をか爲せし、人たゞ一刀にて事足りけるを我はわざ〳〵二本を必要とせんとしたるが、抑そも劍道の極意果して何ものぞや、蓋し惟ふに、人は決して人を殺さゝるもの也、殺さゝるの人に對して何の爲に劍を揮ふの要あるか、人もと我を殺すものにあらず、我れを殺すものは即わち我なり、此の我自から劍を揮ひ、其の劍の揮ひ方を修業し、更に其の數を增加

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

し、粲々しくも二刀を弄して抑も何人を禦がんとする、防ぐべきは、我にあり、人にあらず、殺すものは人にあらず、我なりと大悟一番せしより此の方、彼が幾多の劍の藝能は總べて皆な無用となり、彼に無くてならぬものは唯一つとなりき。彼の劍道は即わち唯一の或る悟りとなりき。

人此の逸話を聞きて之を古人の事とし劍士の事とし、以て自己に關わりなきものとなすこと勿れ。婦女子其の家政を修めて、日夜忙々焉として千百の事に心勞れするとき、深く自から省りみて大悟の工夫に勉めよ。日々、年々、多岐多様の事に熱心するのみにて、途に「此の一つ」と云ふべき中心に思ひ到らずば、渠が家政の藝能の上達覺束なしと戒しむべし。物に大綱あり、事に要領あり、如何なる藝能にも唯一つの無くてならぬ自得の工夫あることを覺らば、苟しくも家政道に修練せんほどの婦女子は、力めて其の大悟に徹せんことを專要とすべき也。

水波隨レ月動　林翠帶レ煙微
功名無二一點一　何要更忘レ機

陸奥錦木塚

燕雨

（錦木細布の緣起）

今はむかし、古へいつれの御代にかありけん、みちのくの奥の細道とこふる鹿角の郡赤盛村のほとりに、あした原と云ふ郷あり。爰に久しくすめる翁の、家ゆづるべき子さへなきを、明暮妻と共に悲しみしが、一人の乙女をなん持ちけり。髪かたち美しき事、世にたぐひなく、紡績の業より、機の手にたくみにして、あらたへの布をおる。さな機なれど、五色の鳥の毛など、織り入るゝ時は、うまこりの綾よりもうつくしきとて、世の人はにしきの名をもよびけり。常は、細布てふをおりて、あした原の市にうり、父母をはごくまひけり。たちて衣となし、身にきても、うしろばかり合ひて、胸の方あく狹き布とて、狹の細布とのちにはよびしといへども、あした原、うりなす錦、けふおりて、といふ古歌よりの名ならむにや。此ほとりのならはしに、色ある乙女を妻とらんには、其家の門に、にしき木と云ひて、尺ばかりの木をまだらにいろ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

どり、或は色糸にて、かゝりたるを立て、文のかはりになす。古へ文字なかりし御代の故事と聞ゆれど、近きころまでも、鹿角の相紋蝶といふものこり、又は、今も、此郷より出るこよみの見えはべるには、いろ〳〵の形を畫き、錢鎌の氣とり讀して、それ〳〵に春秋の心を知らせしは、ふるくみやびかに覺ゆ。扨とよ、かの色ある乙女持ちし家の門邊には、いく本と云ふ限りなく見ゆれど、父母ゆるして取り入りし一本の主を夫に定む。見ぬもろこしの赤縄のえにし、常陸帶の故事も似かよひて、錦木の千束ともよみ、千束にかぎるまで取りいらざれば、其原ひならぬと知るなり。同じわたり、草木むらの奥、廣川原に此にしき木をつくり、あした原の市にうる一人の山賤あり。折から、市に出で商ふには、細布の乙女と、互におもても見知りしが、あでに美しきさまなるに、耐へずやありけん、ふと打つれ立ちし道の歸るさ、をとこ云へる。妻になり給はずや、にしき木や立てんなど戲むれける。をとこの心もやさしく見ゆれば、乙女は、いなめるさまはなけれども、我には、父母あり、そのゆるしなくして、をとこ定めんは、はしり女と、人や笑はむもはづかしといらへけるに、男も、實にもとや思ひけむ、かの乙女の門に、にしき木を立てき。翁夫婦は、乙女のうつくしきに、すゑ〳〵ゆたけくあらまほしく、富める男をいりむこにやすべき、榮ゆる家へは、嫁入りずべき心なれば、などや、貧しき山賤に妻ゆるしせむ。とり入るべき事にも見えねど、この男はなれがたくて、三年過ぐるまでこそ立てけれ。乙女は男のこゝろざしの哀さに父母のゆるしもがなと、明くれしのびめに、かこちくらしぬ。初夜過ぎ、はつ嵐吹すさみ、月しろくさえわたる頃かよひ來には、すゝき尾花ほに出で、葉がくれに狐なきさわぎて物すごし。一夜泣きくらしあはでぞ歸る。午夜頃の空には、人魂飛び、きら〳〵星の影うごき、松葛が谷の、梟の聲に乙女は、ひとりごちふし聞きつ、今もや來る、今もや歸るらむ、奥のほそみちひとり往くらむと、おもひやりて、悲しく泣しづみぬ。立しにしき木千束になりぬれど、ゆるしなければ、男は、こがれて死にけり。乙女も、たへずやありけむ、おなじ日に空しくなりければ、父母おどろき悲しみ、哀がりて、おなじ所に塚をつくり、千束のにしきと共にうづみ、一本のさはら杉をなむしるしとせり。其頃より、此塚のほとりにきりはた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

り、いしあしの聲おもしろく聞えけり。むら雨立おほひ木かげの明けやらぬ折しもは、おり聲の夜の間のまゝにのこるもあり。人々あやしみ行見れども、それとおもはんよもすがもなし。また、風清く、月あかき夜すがら、おり聲おやめば、ひらの長袖を、二人袖引つれてゆく時もあり。近くゆきよりて見れば、見えもせず、この見にゆける人の集れる所を物見既とも云ふとなん。男のかよひ來りし夜、狐さわぎし所は、狐塚とよび、松島になくなと云へるも、古き此ほとりの昔の葉柄に殘り、奥の細道の名もいちじるし。天長のむかし、淳和のすめらみこと詔して、錦木山觀音寺のなつきを下し給はり、三の觀音菩薩を安置し給ふ。これ、人の代はじまり、二十七世繼體天皇のすめらみこと御代しろしめせし時、大提屋長者と申すもの、尊み信じ給ひし、かびらゑのみ國よりわたり傳へし佛像とぞ。弱生山中楽寺、長生山仁拔寺、養老山喜徳寺を造立し給ひ、此寺の御寺を郡中の總社となし、一百四十四社、所せくばかり、甍をならべ、悉く神名帳に載せられ、年々勅使をさし下され、ぬさゝげあり、祝部の木綿たすきに、湯の花、とみ草の千組毬をさゝげ、きねが、鼓の聲にさはふ御代なりしは、たふけの杜、くすきの森の類には似たらじ。貞觀の頃、慈覺大師、爰に錫を卓めしに、をとこをみなの靈あらはれ、大師、影向ありし事、今の代謡本の故事も、とりしめなきの談にあらず。それより、代うつり、人かはり、盛衰さだまりなければ、瓦とけ、礎くだけ、又は、火の神に祟られ、人訪はぬのちとはなりけれども、近き頃までは、塚のほとり、あやとりの聲々のこりて、文月のはじめ、すゞ風吹わたる夜半は、猶、おもしろく聞えしが、或郡つかさの心なかりしは、塚の中、もしや、あやしき物やあらんと、ほりあばき見られしが、其後は、をり聲たえけりとなむ。さばかりの靈地さへ、今は知る人なけれど、いづれも名は敷島の歌にのこりて、歌枕の昔の葉柄の捨處とはなれり。

無名子の云く。むかし大和のかつら子は、三人の男に戀はれ、耳なしの池に身を沈め、津の國、あしやのうなゐ乙女は、二人の男にしたはれ、生田川に身をはふらひ、葛飾の手古奈は、身貧しく、深かき、水くみなどしても、容うつくしきことゞ宮人に肌おす。見る人の懸想を思ひあつかひ、眞間の入江に身を投げぬ。竹とりの乙女、深草の少將、そ

れは都、これはみちのくの果、北のゑみしに隣れども、神の御國のしるしとて、時代の質しきを思ひはかるべし。今の情事かゝることならむや。我他の妻を侵せば、人も亦、我妻を淫す。蛛の網にかゝり、戀の淵にはまる。又も甚しきは、みのこくに人の妻妾を奪ふなど、中古は大名にさへ多し。況んや、其他をや。此記こそ、錦木、細布の縁起にして、草莽の卑人塗抹せしものなれど、代々、布を獻つるためしは、皇朝にいちじるしく、一友人の親しく其地にのぞまれ、里の故事、書のこりしを乞ひ來り、予に見せられしを鉛槧して、爰にしるしぬ。

秋風の
ここに身にしむ
こよいかな
月さへすめる
宿のけしきに

西行

小兒の智慧

長汀

今時は小兒でも馬鹿にはならぬ、いろ〳〵な事を知つて居るから、などいふ人があるが、げに小兒の智慧の發達といふものは、驚くべき程である。先頃華族女學校の幼稚園を參觀して、園兒等の相手になつて、半日を暮した事が二度ばかりあつたが、まとに臆面なく可愛らしき、男女の園兒等が、打むれて、遊び樂しむ有樣を見ながら、實に小兒の智惠の、恐ろしい程に發達してゐるのを見て、頗る感嘆した。

園兒等は、大方、滊車の眞似をするのが好きで、つながりあつて、滊車の進行する有樣をしたり、また砂を固めて、其形を構へたりなどする。そして滊車についての智識は、なか〳〵綿密な處まで屆いて、我等は却て學ぶ處がある。イギリス、エンヂンだの、アメリカエンヂンだの、またはタンクエンヂンなどいふことも知つてゐる。そしてシグナルだの、ポイントメンの眞似もする。或はこれは雪かきだといつて、其形をして見たり、また列車と列車を結ぶ處の彈機の形もする、

實に行き屆いたものである。これは園兒等の鐵道の在る近邊に住つてゐたり、また上流社會なれば、度々父母等に伴はれて汽車旅行をするから、誰教ふるとなしに、自然に細しい智識を得たのであらう。それで考へると、幼い時分から停車場の傍に育つた兒なら、後來に立派な鐵道技師になれるだらう。

また一人の園兒、これは某動物學者の小兒であるが、いつも油虫だの、バッタだのといふとを口に絶たない。泣いてゐても油虫の話をするとやめる。虫が至つて好きで、解剖をしたら面白いでしやうね、私は動物學者になるのだといつて威張つてゐて、學者さんと諢名を呼ばれて得意である、これも境遇によつて、特殊の智惠を得たのである。

いつも陸軍の軍人の往來するあたりの小兒は、大の軍人好になつて、それについて成人の男兒の如きは、海軍帽や、水兵服は大嫌いで、赤筋の入つた陸軍帽や陸軍服でないと喜はないといふとだ。この子の如きも自然に陸軍々人に對する特殊の智慧を得てゐる。されば海軍々人や艦員にしたいと思ふ子は、軍艦の碇泊したり商船の輻湊する海邊で育てたらよいであらう。

小兒は智惠發達の初期で、恰も寫眞の種板のやうに、四邊の境遇で寫り來るものゝ影を捉へるに急だから、惡い家庭、惡い社會に住めば、第一番に惡い印象を獲て、其惡い方に就ての特殊の智識を得る。善ければ善いものを獲る。孟母三遷の教は、實に兒童教育の道を得たのである。

幼兒の時代は五官に觸るゝもの、眞似をする時代である、其智識はいづれも目に觸れ、耳に聞くものを眞似るのである。されば抽象的の説明などでは、興味のしやうがないので、それが爲に善い方に智惠を獲るとは難い。たゞたゞ感覺に觸るゝ境遇の形ちあるものを以てせねばならぬ。さすれば縱くべき丈に其智惠に發達するものである、境遇の具體的現象は、人の媒介を要せずして、刻々に小兒の頭腦に印象を與へつゝあつて、小兒自身には、また、是非善惡の區別などを知らずに、何がなしに、知るある處を以て樂んでゐるから、尤も愉快に、また最も多く、印象を與ふる事に、特殊の、大人さへ知らぬ程の、緻密なる智識を有するとなる。されば兒童教育の第一着歩は、境遇の正しきものを以てせねばならぬのに、今

の人、先づ道義教訓に重きを置くは、甚だ意を得ぬことである。腐れた社會に居て、清きを保つといふは、理想の發達した大人のする事で、彼等には此能力があるが、小兒にはこれが備はつてゐない。

兒童研究の近情

瀧の川學園の大須賀亮一君、白知教育の執心にて再たび米國に渡り、今やケムブリッヂにて志ざす所ろの研究に從事せらる。其の最近の通信中に云へらく、

先年此地に參り候時は、チャイルド、スタヂー(兒童研究)と所謂ゆる新心理學全盛の頃にて、教育社會に一大恐慌を來し、其の術に一大革命にても來るかの如く思惟せられ、心理學者の自負心強く、教育學者の言ひ甲斐なきに寧ろ憐ろき申候ひしが、今日の形況、兒童研究と新心理學との流行衰ろへたるにはあらず、或る點より申さば却つて大いに發達致したるに相違は無之候も、そが教育學の上に如何の影響を及ぼすやの疑問に對しては、心理學者の返答先年ほどに大膽ならず、教育學は教育學、心理學は心理學、其の相ひ關することは密なれども、其の領分、其使命に至りては全然相異なれりとの聲やうやく高きに至り候を、寧ろ悦ばしき新現象と存じ候。實に教育者は心理學の教訓に基づき巧みに其術を施こさゝる可からざると同もに、此外また同情、熱愛など、更に劣らざる切要の武器あることを忘れし如き觀ありしも、今は之を思ひ起す風と相成り、ハウアード大學のムンステルベルグの如き心理學の大家は、大に此點につき教育者の反省を促がし、別に心理學界の突飛者を戒しめられ候。小生此地に滯在中、具さに兩者の相關する所を講究して、一は以て白知教育の上に應用し、他は以て健全精神者の教育に得る所あらんことを望み居候。眞とに左もあるべきこと乍ら、一波一瀾、彼岸の學界進退の様子、實に由由しき限りにこそ。

料理の談

今時の料理は料理にあらず煮込なりとは、江戸の昔しを慕ふ粹客の屢ば憤慨する所ろなるが、之れ眞とに當れり。江戸の

昔しは三百諸侯の奢りと、お留守居のぜいたくにて、衣食の好み自から上れり。中にも、江戸は食ひ倒れの本性にて、其の穿議したゝかなりしに、水野越前、奢りを禁じてより、見かけを質素にして野菜香の物迄に錢を掛ける一種の奢を生じ、風味の粹はいよ〱粹を増せり。若し此般の經驗あるものより今の料理を味わば、此は折介部屋の寄せ鍋か、餓鬼の馳走か、たゞ腹に詰りシコタマ滿たさむとして、些も口と舌とに頓着せずと惡口やしぬらん。或人の説に此は西洋料理の感化なりと云へど、西洋料理の開けざるとも亦た太甚だし。現に一概に西洋料理と云ふによつて明らかならずや。佛蘭西料理、獨逸料理、英吉利西料理、とあるべきに、只だ一向に西洋料理と云ひ、而も醬油から味をつけて皿に入れたる丈にても、矢張西洋料理と心得る人の多きほどなれば、此の變化によつて日本料理一變せりと云ふも太はだ疑念ならん。故に知十岡野氏、此邊の惱みを集めて料理叢談と題し、毎日新聞紙上に氣焰を吐く。昔の江戸子も代言者を得て少しは肩身を擴つゝありと云ふべし。

文藝

女性の俳諧

曲浦釣夫

男女自ら情性に異なる處あるものなれば、彼等が時に觸れ、感に應じて、情懷を述ぶるの詩歌文章に於ては、自ら性の異なる處を、自然に洩らさゝるを得ず。男には男らしき詩歌あり、女には女らしきもののあるは、これ當然の理にして、もしよく、眞に我情を歌へるものならば、未だ、其作者を知らずとも、其詩歌を吟味して、男子のものなるか、女子のものなるかを、判別し得べきものなり。英米古來の女詩仙、其數甚からず、ブローニング夫人、ヒーマンス夫人の如くに、優に男性詩人の大家と肩を比ぶるに足るものあり。而して彼等女性詩人の歌ふ處は、男子と等しく、人情の喜怒哀樂、天地の壯美調和に在りと雖も、情の趣く處、自ら異なるものあるが故に、別種の詩興あり。殊に女性が一生を托する情人、夫婦もしくは兒女に對する深熱可愛の情を歌ふが如きに至りては、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

男性の大詩人と雖も企て及ぶべからざるものあるなり。支那の詩に於けるも、閨怨の哀歌の如きは、女性特有の領分にして、男性詩人また之を歌はざるに非らざれども、斑婕妤の閨怨歌は、李白杜甫の詩想の及ばざる底の邊に、別にゆかしき消息を語るものなるを信ず。

我朝古來女性の歌人、俳人其數多く、殊に一條帝の朝の如き、まことにこれ女性歌人の全盛時たりき。彼等女性の歌人、其情を永うしたるものにて、特に戀、述懷、無常等の歌に於て、女の情を歌へるものを見るが中にも、由來情の儘に詠吟するを旨としたりし萬葉時代にては、女性詩人は、其特色を發揮して後世に殘せり。然るに古今以後、詠歌なるもの、一種の技術となりては、發する所に、漸々男女の區別を消滅したるやの感あらしむ。まして、末世に至りて、題詠を事とした頃は、歌ふもの既に自然の情懷によるに非ざるに、いづくんぞ、性の男女を告ぐる歌あるを得んや。

萬葉集中、女性の歌甚だ多く、殆ど皆情を詠ぜるものならざるはなく、其情は即ち女の情を、有の儘に漏したるものなるを認む。

梓弓ひかばまに〱よらめども
　のちの心をしりがてぬかも　石川郎女

君まつと吾こひあればわがやどの
　すだれうごかし秋風のふく　額田女王

わが背子はものなおもほし事しあらば
　火にも水にもわれなけなくに　安倍女郎

吾背子がけせる衣の針目おちず
　いりにけうしもわがこゝろさへ　同

吾名はもちなのいほなにたちぬとも
　君が名たゝばをしみこそなけ　大伴坂上大孃

吾背子がける衣うすし佐保風は
　いたくな吹きそいへにいたるまで　大伴坂上郎女

君なくばなぞ身にそはむくしげなる
　黄楊の小櫛もとらむともはず　播磨娘子

事しあらば小泊瀬山の石城にも
　こもらばともになおもひわが夫

右の僅にとり出でたるなど、味へばこれ女性の口より筆よりならでは出つべくもあらぬ理を語るものならずや。

女性の和歌の論議は、これにてしばらく擱く。記者は、其俳諧について少しく味はんと思へり。俳諧既に平民的文學の名あるが如くに、俳諧歌、連歌より移り來りて、古今以後、情は飾らんことを勉め、詞は巧みならんことを旨としたる和歌以外に出で、また之を貴紳の翫弄たるに委ねず、短詩形を執りて、情の儘を吐くを要とせり。談林の滑稽は未だし、芭蕉の自然に入りて、俳諧は成り、其角の奇技となり、蕪村の磊落となる。さりながら芭蕉以後の俳人にて末派の輩は、風流を氣取るやうになりて、自然の情に遠ざかる傾あり。多くの女俳人またその際にかゝれり。さりながら俳諧のものたる、文法詩形の末技に拘らずして、如何やうにも時に思ひ起りたる感情を吐露し得るとの易き、和歌の體に似ざれば、後代は和歌よりも俳諧に於て、人の眞情を聞くことを得るなり。されば女性の俳諧には、女情の其儘なるありて、其細なる所、其優美なる所、其やさしき所を盡くすものを多し。いま左に、夜半亭蕪村が、俳諧玉藻集とて編みたる、女性俳人の句集、並に加賀千代尼の句集などよりして、特に女情を洩してゆかしきものを採り出でんとす。

男さへきかれぬものをほとゝぎす　千代
紅さいた口もわするゝ清水かな　同
朝顔につるべとられてもらひ水　同
白菊や紅さいた手のおそろしき　同
髪を結ふ手の隙明けて巨燵かな　同
根をつけて女子の欲やすみれ草　同
鍋わらふ流はづかし杜若　同
起て見つ寢て見つ蚊屋のひろさかな　同
しぶかろか知らねど柿の初ちぎり　同
ゆづり葉の茎も紅さすあしたかな　園女
春の野に心ある人の素顔かな　同
いそがしや蝶を摘めばつくづくし　同
更衣みづから織らぬ罪ふかし　同
負ふた子に髪なぶらるゝ暑かな　同
年よれば風もひかずさむさかな　同
鶯や手もとやさめんながしもと　智月
竜胆の家してやらん雨蛙　同
案山子にも哀さきけむ尼仲間　同

雪やけや夜毎に孫が手をふかせ　同
裏を着て寝よとの鐘か子規　秋色
身を恥よくねるとあれば女郎花　同
武士の紅葉にこりず女とは　同
しみ／＼と子は肌につく寒かな　同

以上の如きは、女俳人として、後代に秀でたるもの丶詠なるが、此外、名は前者に及かず、または其の素人藝にて、人の撰集にも、將に忘られんとして、やうやく一二句ばかり收められたる、はたまた人の口つたへに殘れる程のものに、却てゆかしきものあり。こは彼等は、詠吟を勤めとせず、時に情を動かして感を發すればなるべし。

はた板を子にかこつけてもらひけり　乃龍妻
われのせて廓を出でよいかのぼり　遊女　たま
すみれ摘む袖に飛びつく蛙かな　ふち
なぶらる丶子持ながらや雛遊び　朱芳妻
戀死なば我塚で泣けほと丶ぎす　遊女　奥州
あの中へまろびて見たし青田かな　たつ
夕立やいとしい時とにくい時　遊女　しづか

縫物や着もせず汚す五月雨　羽紅
涼しさや髮結なほす朝きげん　りん
朝顔やのいたる人もなつかしく　遊女　花崎
はせを葉の破れつゞらん松の針　万里
雪見には殿連れはづる心かな　少女　さよ
我子なら供にはやらじ夜の雪　こめ
石女や人形つくる千團子　きち
君はいま駒形あたりほと丶ぎす　遊女　高尾

擧げたるもの、これを打聞けば、いづれか女子の情を語らざる。こ丶に洩れたるものにて、名吟と稱へられたるものもあるべけれど、あやにく、机上に類書の參考すべきものゝ乏しければ、まづは以上のみをしるして、女性俳諧の一斑を示せるなり。

五陵年少金市東　銀鞍白馬度春風
落花踏盡遊何處　笑入胡姬酒肆中
馬上誰家白面郎　臨階下馬坐人床
不通姓字麤豪甚　指點銀瓶索酒嘗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

史傳

ワシントンの父とゲーテの父と

有美

少く道に欠けたればとて、天下無類の悪人の如く責め罵り、殊に禮儀作法を何物よりも有難きものゝ如く、かつきまわして、少しのことにも口喧ましく、下駄のぬぎ方はしかじかなり、飯の喰べ方はしかじかなり、さては帽子のかぶり方より帯のしめ方まで彼是れ罵り責め、暁より日の入る頃まで、我が子の一言一行を是非謗責する親師あり。ゲーテの父の如きは、乃ち此る輩の一人にて一點一畫のかけたるをも其子に許るさず、所謂四角四面の人なりけり。四角四面とは素より悪きことならず、道德も作義も勿論美はしく亦濟きことなれど、たゞこれのみに拘泥して、人の性情を酌み量らぬは、あまり賞むべきことにもあるまじ、否な寧ろ無情なる仕方といふべきなれ。かく箸の上げおろしにまで、コセコセせずとも、自然の慈悲は、よく人の子を擁護して、廿の阪に近よる頃ともなれば、如何に下駄を二尺もあとさきにぬげよと命じたりとて、かゝる無仕付けなることをなきに至るものぞ。されば、親たるものゝ務めは、あまりうるさき細目に立ち入らず、たゞ大體の上の指圖監督にとゞめ置かば、それにて事足るものなれ。是れ召使なぞ取扱ふ秘訣なれど、赤子を養ふの道なり。かのゲーテが、自殺をよきものゝ如く言ひなして、一種のすねもの氣違ひものとなり、世の道德などに心おかず、「若きウェルテルの煩ひ」を書くまでの物狂はしき氣性となりしは、全くその父なる人の四角四面にて融通のきかぬより來りしものなり。如何に父なればとて二六時中己が弱點のみ指しほぜくられ、それ見よ、かれ見よと怒鳴りつけらるれば、仲々たまるものに非ず、追々にはうるさく思ひ、道德とか道とか聞けば、之に唾したきほどの心になり、親ほど悪きもの、世に亦なしと恨み憤り、家のうちに縛りつながれたる手足をは、せめてもの腹癒しにと社會に出でゝ自由自在、我儘一杯にあばれ動かすに至るなり。厭世家放蕩家などいふものは、概ね此種の人々にて、實にかゝるものを出すこと、皆な其親

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の邪なるべし。世に放蕩と厭世とは、甚だ異なるものゝ如く思へど、實に二にして一なるものともいふべく、放蕩はこれ厭世の一態、厭世は又放蕩の一態なれ。あまり細かしきストイック風の親よりは、却てゲーテの如き人の出ることそ自然のまことなれ。茲にまたワシントンといふ人あり。幼りし頃、父が愛する櫻桃一樹を斫りしが、父に詰られて其實を告げしより、今に至るもなほ美談となし、ワシントンが其双葉より香しかりしを稱ふれど、我を以て見れば、其實を告げて隱くすことなかりしワシントンよりも、其實を己が前に吐て怖るゝところなからしめしワシントンの父こそ、今一段上へのものなれ。ワシントンをして此く正直ならしめしは、ワシントンの性質にもよるべけれど、其父の寛仁大度の氣宇預りて力ありたるべし。若しワシントンの父にしてゲーテの父の如く、少しのことにも眥たて額を猩々にして責め怒り、その子を用なきものの如く罵り騒ぐ人ならば、かの櫻桃の一樹をうれしさにまぎれて斫れる事實とて、またも嚴めしく叱らるゝこその怖さに、必ずや秘して之を告げざりしなるべし。志かるにワシントンが何の憚るところもなく、その實際を告げしを見れば、父たる人の日々の行、如何にゆるやかにして、なさけ深かりしかを知るに足らん。又世の常の親ならば、よしこの子が此の如く正直に其實を告げたりとて、少も之を悦ぶことなく、之を斫りしは汝なりし乎、あゝ愚かものよ、志れものよと必ずや聲荒らゝかに咎め罵しり、さてはその子を打擲するまでに至るべし。然るをワシントンの父は少もさる氣色のなくて、我が子の正直なるを讃め之を悦ぶこと限なく、櫻を失へるを忘れたるものゝごときは、何たる難有き心ぞや。畢竟かゝる父なればこそ、ワシントンも正直なるを得しなれ。凡て責めらるゝこと多きものは、その責めの少しにても輕からんことを求むるより、勢ひ不正直のものとなるものなり。故に若し茲に人あり、ゲーテとワシントンと如何ほどの異るところありやと問はゞ、我れはゲーテの父とワシントンの父の相異れるが如く異れりと答へんか。實に勉むべきは子たるものゝ弱點を寛容して、その保育を自然にまかせんとなり。かくして育てられたる子は、煩悶に遇ふこと稀れにして、よくその親になつき、幸福の一生を送るに至るべし。今の世は實に女天下とも稱ふべきほどにて、其子の少く名にてもあぐ

ろことあれば、其母の行狀はかく〳〵なり、素性はしかじかなりなど、噂高く人の口に上れど、その父たる人の功德は殆んど思ふものさへ稀なる程なり。さりとはあまりに男を踏みつけたる仕業ならずや。父の子に及ぼす勢力、實は仲々侮るべからざるものにて、そのことは今のゲーテとワシントンとがことにても、大方はあきらかなるべし。家內にありて勢力を代表する審判人とも見るべき父君たち、須らく律義道德の形骸に拘泥することなく、少く融通のある心になりてその子女に向はるべし。然らずば、義心却て天下の惡を起し、慈悲却て殘忍苛酷の態を帶ぶるに至らんかな。

東京の四谷門と牛込門との間なる土手へ竹を植られしは寛政年中の事なり從前この土手は屢ば崩るゝことあり隨て修すれば隨て崩るゝゆゑ之を杵き止るには竹に若くはなしとて之を植たるが其後は崩れも止みしたるを明治十一年の頃城垣に竹あるは觀望を損するとの說にて刈除きしが後に果して損害あり。船河原橋の下に水道を設けしは天保中江戸川へ鯉魚を養はれしときに設けられしなど云ふは取るに足らず昔し江戸川堤に溢るゝ時向ひの岸に衝突し大に土手を壞ちしゆゑに石垣を以て其水勢を殺ぎたるなり寛延三年に神田川の浚渫ありし時一旦之を廢せしが其後又土手を損せしとて故の如く石垣を立たるなり古人の慮は周密にして爰に用意のあるよゆへ今人みだりに改ため毀つるは宜しからず。

雜錄

群馬縣の公娼廢止

群馬縣は公娼廢止に於て先鞭をつけ、天下に正義の名を掲げたる神聖の地なり。然るに、何ものゝ卑劣漢ぞ、こたび突如として其の再設に運動し、密かに其筋に手蔓を探りて、醜陋の目的を遂せんとせり。縣下正義の士如何でか之れに默せんや。直ちに一齊に起つて大反抗の步武を整のへ、隆々として破邪降魔の義戰に裝はひつゝあり。左に掲ぐるものは、其の陣頭の旗幟告白なり、

○群馬縣廢娼の歷史摘要

○明治十三年故宮崎有敬湯淺治郎中島祐八宮口二郎竹內鼎三野村藤太眞下珂十郎諸氏外二十八名が廢娼請願書を時の縣令楫取素彥氏に提出し同年の通常縣會に於て廢娼を議決したり。

○楫取縣令は明治十五年四月を以て爾後六ヶ年の猶豫を與へ明治廿一年六月限り娼妓稼業廢止を達したり。

○明治廿一年五月に至り時の縣知事佐藤與三氏は當分の間貸座敷及娼妓營業に對する取締を公布したり。

○明治廿二年七月廢娼運動の爲め上毛青年聯合會を組織す。

○同年十一月の通常縣會に於て娼妓全廢を可決し尚衞生費目中檢梅費及貸座敷娼妓賦金等も娼妓に關する事項は悉皆削除のことを決議したるに知事は悉く之を認

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

可せり。

○明治二十三年一月上毛青年聯合會は首動者となり縣下三千二百七人の連署を以て元老院に廢娼を建白す。

○佐藤縣知事は明治廿三年三月三十一日を以て縣下新町安中妙義の三ヶ所に限り貸座敷及娼妓の廢止を達せり。

○同年五月上毛青年聯合會は首動者となり縣下二千有余名の連署を以て內務大臣へ廢娼の建白をなす。

○同年の通常縣會に於て十七名に對する三十有余名の大多數を以て再び廢娼を決議したり。

○同廿四年九月十二日縣令第三十二號を以て明治廿六年十二月限り娼妓及貸座數全廢を公布せらる。

○同廿七年一月より廢娼實行せらる。

○同廿八年の通常縣會に於て出席議員三十名（此內非公娼議員三十八は退席し殘り三十名にて組織したるなり）中廿五名にて公娼設置の決議をなす。

○同三十年の通常縣會に於て八名に對する十八名の大多數を以て先年縣會に於ける公娼設置の決議を取消す。

○佐藤知事の當時に於ては縣會と知事との確執となり縣會の停止となり解散となりたる等非常の忌むべき事實あり。

○公娼運動の首動者中には收賄の嫌疑を受け縣會より委員を撰び調査したる等の事實あり。

○公娼派に於ては廢娼派縣會議員を出席せしめざらんか爲めに虛僞の電報を發し若くは議員を歐打する等非常の混雜を極め野蠻的行爲あり。

○公娼設置運動委員と稱するものは縣下の利害に關せす只私慾利己主義のみに依るは明なる事實なり。

○以上の結果は遂に全國の輿論を喚起し廢娼問題をして各府縣會の議事に登らしむるに至れり。

◎風俗上統計の實證

本表は本縣に於ける非公娼主義者一仝の依托により編製したるものにして石島貞三郎、鈴木友次郎、松宮武雄、の三氏か高崎聯隊區司令部又は群馬縣警察部の調査に準據し調査したるものなれは其の正確なるは勿論依て以て縣下に於ける風俗上の模樣を窺ふに足るへし

發行者記

風俗に關する統計（群馬縣警察公報による）

年別	料理店及飲食店 年末現在	料理店及飲食店 月別平均	淫賣の疑ある酌婦 年末現在	淫賣の疑ある酌婦 月別平均	梅毒 患者 年中惣數	梅毒 患者 月別平均	梅毒 死亡者 年中惣數	梅毒 死亡者 月別平均
廿五年	二、一五四		七〇〇		五、七三四	四七七	六四	五
廿六年	一、九四七	二、二一九	三九〇	六〇三	五、六六九	四七二	六〇	五
廿七年	一、八九〇	一、八六七	三五七	三七三	五、五〇三	四五九	四四	四
廿八年	一、八七〇	一、八四七	三九二	三六〇	五、三六六	四四九	三四	三
廿九年	一、八八四	一、八六八	五一三	四三三	四、五三三	三七六	七〇	六
三十年	一、八六四	一、九五二	五三五	四八五	五、二二九	四三〇	五七	五
卅一年	一、九五七	一、九四三	四五三	四五〇	三、三八六	三六二	三	二

備考本表中明治三十一年は九月迄の調査にして年末現數は仝月末の現數にして年中總數は仝月迄の總數なり而して月別平均は仝月迄の總數を八分したるものなり本表に依りて考察すれは廿五年より卅一年に至る七ヶ年間に於ける料理店飲食店賣淫有疑の酌婦は廿五年より廿八年まで遞減し來り又廿九年より漸次增加の傾きあるは之廿七、八年の征淸戰役後人々漸く奢侈に流れたるの結果なるべし若し之を廢娼の結果なりとせは廢娼の當時より漸々增加の兆を現はすへきに却て廢娼の當時は漸々減少の趣を呈し數年を隔てゝ增加の兆あるは確に社會人心の趨勢に原因する者にして決して廢娼の結果とは云ふへからす次に料理店飲食店及賣淫有疑の酌婦は廿九年より三十一年に於て增加を見ると雖とも尙廢娼以前なる廿五年廿六年の多數なるに及はす只廿六年酌婦の年末總數か最近四年間に比して少數なるを示せるのみ更に三十一年一月より八月までの統計によれは八月末の料理飲食店か前々に

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

比して多數なるを示せしも之を月末平均によりて見れば卅年月別平均よりも小數なり前橋に至りては年末も及月別平均共に前年度に比して著しく減少せりこれ廿九年度増加し來りたる為か漸く減少するの傾を呈し來りたるを見るべし前橋の減少は蓋し人心の傾勢によるの外生絲取締の實施によるものあるが如し例へば廿七年生絲賣買の取締規則を以て嚴重なる取締ありし時は非常の減少を見爾後漸く寛なるに及んで増加の傾きある以て一般を證するに足るべし

前橋患者は廿九年以來三十年に於て少しく増加を見たるも要するに年々減少するのみにして開娼前に比すれば開娼後は非常の減少なり死亡者に於ても亦開娼前後相對比して開娼後増加を認めず唯に三十一年のは八ヶ月間の合計なるを以て確なるを認むる能はずと雖も今月別平均に改むれば最近七ヶ年間に於ける最も減少數にして開娼當時の廿九年に比すれば實に於て月別平均百余人死亡者に於て三人を減したり今前橋患者につき存娼は決して有害なるものと認むる能はずして却て開娼後其害の少きを見るは又意外に感ずるものなきにあらざるべし

藝妓増減表（前橋警察署調査）

廿八年		廿九年		三十年		三十一年	
年中總數	月別平均	年中總數	月別平均	年中總數	月別平均	年中總數	月別平均
九、八四〇	四八八	六、七二八	五六[illegible]	六、三九八	五三[illegible]	四、[illegible]四五	五九四

備考本表に示す所によれば藝妓の増加は廿九年以來頗る甚しきものあり然れども開娼後の當時に於ては其増加なくして廿九年に至りて急に年中總數に於ても月別平均に於て殆んど平均に増したるは正に開娼の結果と云はんよりも寧ろ明治廿九年の統計に於て全しく廿九年以降増數を見たると全く一理にして廿七八年征清役の結果一時人心の傾向が著修に流れ藝妓は紳士の普通玩弄物の如くに見做されたる流行者の風並むと共に其需用が増したるによるまた我國市場に於ては他府縣に比して藝妓賦金低廉なる亦與て大に力あるものとす

且つ藝妓の多きは前橋市に於て之を占むこれ大に注目せざるへからざる要點なり而して前橋は市街殷盛加ふるに米穀取引所米繭賣買の市場ありまた金融活潑なる近郊の遠く及ざる所而して是等は總て藝妓增加の媒介たるは衆目の認むる所にして亦如何ともすへからざるものとす

明治三十年花柳病調査表（高崎聯隊區司令部の調査による）

埼玉縣

徵募區	檢丁人員	患者人員 現在	患者人員 已往	百分比例 現在	百分比例 已往
兒玉郡	六二三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
秩父郡	七〇四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
比企郡	八九六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
入間郡	一、九〇四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大里郡	一、三八[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	九、五八〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

群馬縣

徵募區	檢丁人員	患者人員 現在	患者人員 已往	百分比例 現在	百分比例 已往
邑樂郡	八三〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
新田郡	五五一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
山田郡	六〇八	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
佐波郡	七〇九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
前橋市	二三六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
勢多郡	九九一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
利根郡	四六四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
吾妻郡	三九〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
群馬郡	一、三四六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
碓氷郡	五九〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
北甘樂郡	六四三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
多野郡	六一〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	七、八八八	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

備考

一、同一聯隊區内徵募區を縣別に區分したるは患者の比較を見んか為なり

二、本表中現在患者の數を埼玉縣と群馬縣とを對照し見るときは比例上群馬

縣に於て五拾余名を減し又百分比例に於は著く壹人七分四厘を減せり

三、本表中現在さは明治卅年檢丁の際現に患ふるものにして已往さは此當時に於て單に痕跡を留むるものを云ふ

四、本表は可成丈け數年前のものも娶したきも司令部に於ては三十年以降調査に着手したるを以て其以前に於ける細密の調査を知るに由なし

五、本年度の分は目下調査中

亡友筆のあと

信夫さゝ子

皆人は花の衣となりしかど物思ふ身には昔の色にさく花を見てはいよゝ昔の袂のかわきがたきにそわりなき業なれ今日はひねもす春雨の降りくらしていとゞ袂の露けゝればせめても少しはなぐさまんと古りにし書ども繰りひろげ讀みもてゆく中にさゝやかなる紙に歌やうのものかきつけたるが其中よりぞいでたる何ごゝろなうしわおしひろげてうち見やればこれなむわがなき友のあどけなき筆のあとにて何時の頃にかおくり玉はりけん玉章のきれなりける

　さくらの花一えだしん上いたし候あすは公園にゆきませう

などあるにまづ胸つぶれて文字もはや涙に見えわかず

われは幼くしてはらからとては只一人の兄ありつるのみなれど其兄さへわか二ツの年に身まかり玉ひて家にはわれ一人いとわびしう暮しつるが氣弱くさうぐしきを好まぬ質なりければ友とてもなかりきされど故ありて君が家居の傍にうつりすみてより君の優にやさしくいと物靜なるがしたはしくてかたみにとひもしとはれもしつゝ春の長き日も夏のあつきあしたもあるは花草をつみてまゝ事に日かげのかたぶくををしみあるは雛かざりにあつきともわすれ秋の夕も冬の夜もかた時はなるゝとてはなかりきこはわれらが五ツ六ツの年なりけり筆にかきしるさむも涙の種なれど其頃の事なりきある時君の來玉ひて遊のいと面白かりしものから夜の更るまで打興じつゝありしにむかひの人來りてそゝのかせどいなみて歸り玉はず小さき床に二人して共に伏しつるとありきまたある時はわがあやまちにて母君にいたう叱られつるとありしにをりから君の來合せてわれよりはまづなきまどひてわび言いひ玉ひつるともありきされば皆いかでかくは心のあひつる同胞にもましてむつましなどいひあひけり次の年より學校にゆくに雨にも雪にも君まづ訪つれ玉はずばわれ、われおくるれば君と互に誘ひてうちつれたち學にも遊にも影の形といはんより躰一つといはん程なりきされば遊行にも君ゆかざればわれの樂なくわれおらざれば君も亦いで玉はぬが常なりけり君

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が一日二日家をはなれてやから計宿り玉ふとなどある時は何となう物悲しく好みたる人形さへもてあそぶとなく暮れゆく日影歸りゆく鳥などうちながめて何とはしらず泣きたるともありけり此頃にやありけん學校にて消息文といふものの學びたりとて一日に幾度となうゆきもし來もしつるものをなほはかなきとなど書きつゞりて使して送り送られつゝ此上なき樂とはしたりき此折の文とも大方はうつせるに今其一ッぞゆくりなくいでたるなる

かくて明し暮しつる中に暇ゆく駒の足早く七年八年は夢と過ぎて妾も君も十五といふ年になり小學校の課程を終へつ其後はたちぬひの事女の道など學ばせんにもよき師とてはなく父慮りやらんも心弱き質なれば他の女共の中に立ましらんは得ぜじとてわが母君の强て君が母君に乞ひてわれは日々君の家にゆく事とはなりぬ是よりは君が母君を師とも親とも賴みて文讀み物かくにも君と机をならべたちぬひ禮式なども君と共に學ぶ事のうれしかりける事よされはわれはうき事も悲しきともしらで樂しき月日を過しつるものをいかなるまがつみのわが上に降りかゝりけん君が家は故ありて其冬東の都へ移り玉ふことはなりぬ此事きゝつる時のわが悲はいかなりけん姉とも友ともむつびつる君にははなれ師とも親ともしたしみつる君が母君には捨られ實に俊寛僧都の鬼界ヶ島の苦もこれには過ぎずと思ひぬいよゝ立ち玉ふ日限などの定まりては又一しほ悲しく二日三日といふになりては君が家を音づるゝ力もうせて衣うちかつぎて臥しぬ君もまた訪ひ玉ひては互に泣きぬあはれ一日の一年ともなれかし一年の千年とももとあだなるとを願へどかゝる時の日は早く過ぎていよゝ明日といふ日になりぬ。母君に說きさとされて心ばかりの餞せんと改めて君を訪ひぬされど訪ひしも訪はれしもまづ袖のみぬれまさりて詞の葉だにもなしやうやくにして君のたまはく隔つとも百里に足らぬ道のりとこそ聞け滊車に乘らば一日にて行きもし來もしつべしさななげき玉ひそ命なりけりと古人も歌ひ玉ひぬるものを常には雁の便にて恙なきをしらせ玉へ又來む春都の花も咲かば音づれ申さむに母君もろ共都にまう上り玉へ程經てあひなばいかに樂しからむなどいひ慰め玉ふわれは只胸塞りてうなづくのみなりき今夜限なれば又あふまでのかたみに玆に宿りていかにもして遊び玉へなど君が母君にすゝめられ

て來む春の事など契り都の樣やいかになど語りて臥戸に入れどいもねず北風の吹かばわれを思ひおこしてよなどいへば彼の山の彼方にはわれありと知り玉へなどいひ玉ふ中に明けぬあはれ君今夜限ぞとは知りしやいかに

朝餉も終りぬれば今は時移りぬいざなどひしめくかくなりては又悲のいやまして顏を得上げず、人々にはしたなき樣見られんとのはづかしく且は門出し玉ふ人に泣顏見せまゐらせんは如何と忍び耐ふれども涙のみぞ心にはまかせではふり落つる、停車場にゆきつけば車の用意は殘りなく調ひけん人々をうながす鈴の音いそがはし氣なり諸人の乘りうつるを見ては今は堪えがたくて君と相抱きて泣くかゝる時のとなれはかばかりの事は皆人もゆるしてんや驛夫等は物のあはれもしらでとく／＼などせきたつ、やがて果つべき名殘ならねばとて人々君をしひて車には上らしめぬ今しばしは後れたりともと怨ずれど甲斐なしなほ一言だにもなほ一目だにもと走り寄らんとすれば相圖の笛高く響きて車はきしり出しぬ吐き出す烟の一團また一團滊車は次第に遠ざかりゆきて君の窓により玉ふ姿も定かには見えずなりぬ遮るは霧か烟か果た涙かやがて其烟さへ遠く一抹の烟雲となりて滊車の形だに見えずなりぬ車の走る音のやゝ高く響くは彼處の橋にかゝりしにやあらむ滊笛のかすかに聞ゆるははや隧道にや近つきたるならむ今は其音さへ聞えずなりて鐵路いや遠に君のさりにし跡を示しおもてをかすめて吹く朝風一際身にしむ

昨日までも今朝までもすみ玉ひにし家居の何となうさびしげなるを見てはありし日の事のみ思ひ出されて涙にのみあかしくらしぬあはれ袂のかわく時なけれど君は遠く雲井の外にあるぞわびしき

かくて後は消息の度毎に都の樣などいと細々と認め玉ひていつも其後には來む春は來玉へ彼處にもゆかむこゝにもなど書き玉ふ指折りつゝまちにし春の來て都の花の音信はいとしげけれど母君のすぐれ玉はざりしものから終にゆかで止みぬ夏と過ぎ秋も半は過ぎて山里に近き處は霰さへ降りていと物悲しきに此頃は打絶えて君の音信だにもなし心もとなくてあるに程經て少し心地あしかりけれど今はすぐれたりなどいひおこせ玉ひぬ、冬のはじめになりて來む夏はなほ遠く行かむも計り難しかくなりてはあふともいやが上に難かりなむわかれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

奉りてよりはや一年となりぬればいとゞなつかしさまさりて君を夢みぬ夜とてはなし春ともいはず都には來玉はずやなど消息し玉ひつれど心にまかせねばたゞ思を御容ゆくかりがねによせて來む春を契り此度はいかにもして上るべしかはらぬ御姿も一目は見奉り度などしるし奉りぬ其後幾程もなくて君の母君より君がいたつきのよしいひおこされぬされど四五日も經なばおこたりなむ心遣なし玉ひそなど書そへ給ひけり如何ならむと心許なくて御容子尋ねまゐらすればいつも同じやうなりとのみ御返しゝ玉ふいと心苦くて悲しく覺えしがかくて一月の末つ方に至りまた君の母君より昨日より病のあらたまりて今は望少し一目だにもあはせは奉りたくはあれどなど文字もしどろにかきおこせ玉ふいたく驚きあわてまどひて涙だにもいでず明日はいかにもしてゆかむなどいふ夜半悲しき電報の來て君のはかなくなり玉ひし由しらせられぬげに夢ともうつゝともわれはしらず人心地つきたる時は人あまた枕がみに集りてくすしなども見えたりせめてはなき御姿だにもと思へど今はせむやうもなし只涙に身をぞ浮したる病中の御有樣いまはの御樣子などきゝてはひたすらに悲しき事のみおほかるが中におよびをりつゝわが上京の日をまち玉ひし事夢うつゝの堺にありてもなほわが奉りし消息としいへば讀みきかせてよとのたまひし事などきゝては身も世もあられずことに君は心靜かに取亂し玉はぬ質ながらみまかり玉ふ日となりては幾度かわが名をよび夢の中にもよき衣いだしてよけふはうるはしければ上野にや案内し奉らむになどのたまひし由きゝてはあはれかの節に兎の角もなりはてつらむには同じ暗路のあと追ひまゐらせしものをと怨ずれど甲斐なしかゝる御有樣をまのあたり見玉ひつる母君の御心や如何なりけんわれはとひ慰め奉る力もなかりけりげにわかれてはあふとのかたきはうき世の習にていつれ物憂からぬにはあらねどさても悲しきはまた逢ふとのなき別なりけりあはれかりがねの都を後に歸り來るはあれど玉章かけたるはなく南の山とこしなへに高けれど君は今いづちゆきけん花もさき鳥もなくとの音信われどいかで都の地にはゆくべきすみすて玉ひつる庭の木草の春にあひて昔しのまゝに榮ゆるを見てすら涙のひまのなきものを又思はざる文などのいでゝ有りしむかしを忍ぶつまとなりいやが上に露けき袖をぬらしける事よあなはかなしや

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

美のいろ／＼

有美狂生

古きホーマルのイリヤッドに、優しきパリスは、ヴエーナスが賄れる美はしきヘレンを盗みて、智慧の女神なるミナルヴアと、後の世を見る力に富む嫉み深きジユノウに反けるとかや。今の世の哲學とは、これミナヴアの作りましたるもの、その宗教とは、是れヂユノウの生み給へるものらし。パリスが二人の神々に離れてヴエーナスに行けるも理りなり。小六ケしき論議が煩ゆかしく見ゆる人生觀とは、假令へばとげある鞭の如く、之を抱くこと頗る難し、この所に靜安なく安平なし。善を思ふと益々苦み、悪を忌て愈々悶がく。たゞ美を想思する時のみ、まことの安きはあるなれ。故に、美の世界のみは、波なく風なく、悠々自適すべき靜けき海づらとも見るべく、世間の無風流なる俗輩さへ、一日の安きをと、けふ此頃上野、谷中に足運ばすも無理なき限なれ。嗚呼こゝには美神の影まことに映れり。されどその醜ろげなる箇所の多きぞ悲しくまた恨めし。

◎日本繪畫共進會

谷中初音町なる美術院に開ける此度の日本繪畫共進會こそ、近年稀れに見るの出來ばえなれ。その畫面のすべて形に於て大きやかなるのみならで、實質に於ても又大なること、是まで多くその比を見るべからず。加ふるに、花鳥風月の景色畫少なくして『人』をうつすこと著く增加し居るは、蓋し一大進步の徴影なるべし。ヴエニス、パリなどにある展覽會の目錄を見るに、景色畫は頗る少くして、たゞ全躰の二分を占むる位に止る。今我にその出品を大觀して、特に眼を驚かせるは、西洋畫の描法頗るその間に混和し、線を用ひて巧妙を競はんよりは、寧ろ墨色色彩の濃淡によりて、人目を新たにせんとし、一見水彩畫に彷彿たるもの多きの一事なり。下村觀山氏の『春曉』『秋夕』の屏風二雙、村田丹陵氏が『旭映』、工藤符鐵氏が『小兒』小坂象堂氏が『秋郊興』の如き、皆なその著きものにして、殊に丹陵氏が『旭映』に至りては、純然たる油畫とも見るべく、海面に日の出のうつれるさま、全く先人に見ざる描きぶりにて、たゞ色彩の濃淡により靜波色あざやかなるをうつし、一本の線さへ用ひざるなど、古風の畫家之を見ば必ずや驚歎の外なかるべき乎。されど、美術院の畫士今回の成効は、素よりその逆境にありて天下の物笑ひたらざらんことを期せしにもよるべければ、全くこの洋畫の描法を巧に日本在來の畫法に適用せしによるなるべし。今や眞に日本畫一轉機の秋なり。

◎白馬會展覽會

憐むべきは白馬會展覽會なり。それ人順境にあること一年なれば、乃ち著しき退步あらんと。昔やまことなり。白馬會は遂に眠れり。美術學校を乘り取り、天下の歡迎に遇ひて、全くその勝にほこり戰に飽けるものか。されば日本繪畫共進會は全くその趣を倒にし、景色畫の出品頗る夥しく、人に關するもの却て前回より甚く減少し今は殆んと皆無の姿となり、一躰の作品皆な生氣を欠き、寢ぼけ顏なるもおかしき心地す。評判の『小督物語』さへ、人を動かすほどのものならず、バツク、グラウンドの配合妙を得ず、たゞ遊冶郎の居に倚りかゝれる女の形に、少く『活きたる人』を窺ふべきのみ。久米氏のものに至りては、美術に欠くべからざる朦朧を欠き、四角四面に上下せる古武士の如く、餘韻少くして妙味淺し。たゞ黑田久米諸氏の師なる人と聞くコランの畫くなるスチタチユにてもあるべきか、携ひける半裸躰の女人像のみ、木炭畫なりといへ氣韻高く、運筆凡ならざるものゝ如く、何となく神々しき心地せらる。他にウ井ツマンの『水汲婦』と黑田氏が『物淋し』の外、『これは』と思ふべきもの殆んとあるなし。白馬會たるもの、此く製作に甘じて一段の進步なくば、また洋畫反動の期近くにあるべし。その時餘を嘲むも恐らく亦遲からん。

◎裸躰畫を見る

横濱の山手六角濟吉氏、パリ、サロンなる裸躰畫の、寫眞版にせるもの多くを藏すと聞き、一日菓子を介して之を見る。その數大凡そ五六十枚。されど仲に就て取るべきもの、左程に多からず、我れはたゞ三枚秀でたるを見しのみ。巴里などにても、モデルは多く素性賤しき女どもより取るものと見へ、何れの顏形も何となく賤しげに、仲には一見嘔吐を催さんとする如きあり。これは何所の國も皆同じ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かるべく、エキスプレツシヨンの美はしきものなど、多くはあらざりけり。またヴエーナス、ミダなど古き希臘の女神を始め、ニムフなど稱ふる水神をうつすに、當世風の婦人を以てせることと多きも一種の奇觀なり。これには蓋く人のさまぐ\なる理窟もあるべけれど、矢張り我邦に行はるゝ佛畫などの如く、なるべく今のなりふりを避けて、ふるき古の姿ひせしむることと、神々しく人間を離れたるのもしゝ如く思はれて、難有く拜まるれ。また或る想を現はさんとのためならず、たゞ配合のために女を主にしたる傍に男を描けば、必ずその男は醜きさまにせらる。これは反照にて婦人の美を増さんとの心掛けなるべけれど、却て『全く美はしき想ひ』の之がためにそがるる如き心地して、腹たゞしきものなれ。またおかしきは、何れの畫にても婦の腰の一方ならず、大なることとなり。すべて西洋の婦人はコルセットの用ひらるゝより一体に大なるものとは聞きしが、かくまでなるとは思はざりき。されば、之を背面よりうつせば、自然の平均を失て、頗る醜し、されど自督婦人の裸体こそ如何に美はしきものなるか、何れの時か、かいま見たき心地す。我れ曾て楽の淵に一婦人の衣ぬげるを見しが、かゝる人こそモデルにはよかめれと思へり。これは丸まげに結える人の妻なりしが、兩の乳房の形ち美はしくふくれて、高く山をなし居たり。もし婦い美にして眼にあるものならば、我れは婦人裸体の美は乳房にあるとと云はん。

◎水おしろい

近頃水おしろいといふものあり。乳色透明の水液にて、之を塗れば、わざとらしく白粉を粧いし如き跡なく、しかも顔の肌白くなることと生の如しといふに欺かれて、之を使用せらるゝ婦女多しと見え、何處にも「水おしろい」の看板なきはなけれど、こは危険の甚しきものなり。これは別に神妙の製法にもあらず、激烈なる曹達を水に溶かして、少しの香料やグリスリンなど調合せしに過ぎざるべければ、之をつけて白くなるは、かの遊離アルカリ多き石鹸を用ひたると同じ道理にて、皮膚の上層が漸々腐蝕し、皮のむけたるより起るものなれ。かくの如く所謂『あれゝたる色の白くなりしと心得、得意なる美人方こそ、氣の毒なれ。間々近などにて、御顔の皮むけて、白き粉を一面にまきたらん如き年若き乙女などに逢ふことあり。こは概れ水おしろいに勉強の結果なるべし。是に於てか我れは言はん水おしろいに高き價を拂はんよりは、鈍れたる小刀一挺備へつけて、朝夕その御顔を掻きこするに如かずと。

◎淺草玉乘一座の奏樂

惜むべきは[illegible]なれど、おかしきは淺草六區に乘の音樂隊なり。その囃さの壯快なるは、人寄せには都合よかるべけれど、『春雨』や『かツぽれ』や『ヂヨールチヤ、マーチ』などのみ奏し居りて、その曲藝と全く何のかゝはる所もなきことと、藝人の身にも喋ど調子の取りにくゝ、演藝に不便を感ずることとなるべけれ。されば、見る見物は素より何の面白味を感ぜざるとなく却て耳やかましきのみ。美術國の譽れある日本人の、美術心なきは今更ら驚くにも足らぬことなら、如何に教育少き人々の集りとはいへ、少く工夫を凝らして、その奏樂を曲藝の調子に合はせ、これまでの『はやし連中』の如く、眼を耳より入る調和の美を感ぜしむることと緊要ならずや。

◎ユンケル氏と幸田嬢の合奏

去る同十七日燈が岡奏樂堂にユンケル氏奏樂會の催あり。中に同氏と幸田延子女史との合奏ありしが、こは、ユンケル氏はベルリーン音樂院より出で幸田女史のウヰーン音樂院より出でしより、ベルリーンとウヰーンの腕くらべなりとまで囃させられ、當日の呼び物なりしも、實際きしたることもあらで、勝利はベルリーン方に上れり。幸田女史の何となく腕落つかず、まわく\せる氣色の見えて、丈けも高ければユンケル氏に飲み込まれたるものゝ如かりしは、仲々に腹たゞしく覺ゆ。

◎美術家とは何ぞや

我が觀たる宇宙自然の美を、出來るだけその製作につめ込めんとする、これ乃ち美術家なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

富士の峯

花影子

たかきかなあゝ高きかな不二の峯、
天地のわかれし時ゆきえやらぬ
白雪をかむりとなしてそびえつゝ、
はてしなき大平洋のなみまより
大空の大とのに登る日の光、
いやさきに迎ふるものは汝なり。
大智慧のエホバの御手の我國を、
わだつみの深き底よりひきあげて、
うごきなき國の基をすゑしより、
あめつちのあらむ限は國たみに、
敬虔と正義のおもひみたしつゝ、
汚なき人とおもひをわかちつゝ、
天がしたひとりの義人あらぬとて、
なげくとき心はげます友となり、
忠と孝のかゞみとなりて世をてらす、
聖きかなあゝ聖きかな不二の峯。
天津日の光をうけてゑめるとき
うるはしきいましが姿處女にて、
たちわたる夜の奥にねぶるとき、
あいらしきいましが様はちごなれど、
大岩をとばすはやちの吹くときも、
いなづまの雲の高根をさくときも、
かはりなき汝がさまのけだかさよ。
いましこそ大和をのこの心なれ、
いましこそ大和をみなの姿なれ。

晴れし日ははてなき空を屋根となし、
くもる日は湧きのぼる黒くもを、
身にまとふ衣となしてなりとよむ
いかづちはいましが歌ふ讃美なり。
疾風もしらべあはせて歌ふなり、
我國のうちやすけくをさまりて、
きよければ神のめぐみを示しつゝ
汚るれば烟を吐きてもえあかり、
くされたる人の心をきよめつゝ
罪をやくおほみ怒をしめすなり。
高きかなあゝたかきかな不二の峯
とこしへにいましは國のまもりなり。

あれやすき
草のとぼそをあけばまた
夜中の野分に
かこちもやせむ　春湖

時　文

文界雜評

なにがし

◎基督教的文學思想

歐米の文學は、世界文學中の、至高至深なるものたることは、今更いふを待たず。此文學や、溯源、希臘羅馬の文學に在りと雖も、これをなして、能く其大なるを致さしめたるものは、基督教にあるとは、爭ふべからざる事實なり。古文學復興ありと雖も、ルーテル及、ジョーヂ王の聖書飜譯あらずんば、烏んぞ、今日の歐米文學あるを得んや。

我邦に基督教の傳來するや、中道に挫折して、其後更に傳教を始めてより日なほ淺く、加ふるに、現今教會の不振、傳道の左程あるを以て宗教としての勢力は、頗る微々たりと雖も、これに由來する思想は、既に、歐米文學によりて輸入せられて、今日の文士の思想が、多少之に影響せられざるなく、且つ、之を欠くものにして、而して見るべきの文字に乏し。佛學の文學は、また稱すべきもの―なりと雖も、今日佛教界の青年文士にして、多少の名あるもの丶、其思想は、即ち基督教的なる歐米文學の感化に成れるものたらざるはなし。

今日文界に名あるもの丶他に比して、基督教界に多く、然らざるも、少くとも嘗て基督教を學びたるものに多きは、認むべきの現象なり。徳富蘇峰、竹越三叉、植村謙堂、内村鑑三等の如き、現今有力の文士は、これ耶教を重んじ、またこれを信ずるものたり。また新進文士中に就いても、同志社其他の基督教學校に學びたるものにして、他に傑りて、見るべきの思想文學あり。基督教的なる文士の筆には、情あり、涙あり、また高尚なる理想を寓するを以て、文學は、邪相の表面に馳走せずして、情緒くも微ならんとを志さず。讀む者從つて感動を惹起せられずんばあらず。世人は、既に乾燥なる文學に飽けり、情致乏しき文學、淫靡なる小說を厭へり。これ等はまた社會の益をなすものに非ず。されば、從つて渴望する所は、基督教的なる文學に在らずんばあらず。我國に於ける基督教は、文學思想を以て、先づ社會人心を感化したる後に、はじめて、其宗教の勢力を揮ふべきものなるべし。

◎基督教界の新聞雜誌

基督教の我邦文學に從入せることは、其信仰の傳播よりも、幾十百倍の勢力を以てすることは、今更いふを待たず。而して又正面に基督教の看板をかけて、其布教及び神學の研究を主旨とする新聞雜誌にして、文學上幾分の價値を有するもの尠からず。まづ其中の屈指なるものを舉げんか、

福音新報、基督教新聞、護教、六合雜誌、眞理、新世紀

等なるべし。植村謙堂は福音新報により、小崎弘道は新世紀基督教新聞により、由來の一派は護教に、ゆにてりあん及新神學の徒は六合雜誌に據る。謙堂の如きは、今の文界稀有の文學者なり。然れども彼は世に示すもの多からず。往年の日本評論の文學評論の如きは、明治文壇に於て多く聞くべからざるものなりしも、世に之を說くに堪へたるの非なかりしが爲めか、久しからずして其影を沒去たるは遺憾なりき。なほ福音新報は、一の傳教播なりと雖も、其謙堂の手に成れるもの丶讀むべき味ふべき多く、或は宗界有數のものなりと稱するに堪たり。基督教新聞及護教は前日の勢力を減じたるの感あり。六合雜誌は、大西操山の其時文に說きたる間は、甚だ見るべかりしが、其ゆにてりあんと合して後、近時の消息や如何。新世紀は、小崎弘道、同志社退引後の氣焰を以て、基督教青年を合併して生れ、宗教論と共に、時事を論じて、六合雜誌を凌がんとす。眞理は、普及福音教會の機關として、往年スピンナル、シュミーデル等の我邦在留中は、神學界に貢獻する所頗ぶ多く、これによりて實に、我基督教界の神學思想は一革新を來したり。其功たる長く之を紀念すべしとなす。然るに近時に至りては頗る當年の氣焰を消耗したるが如し。

◎日本基督徒の文學

日本基督教徒の文學は、近年頗る進步したるやの觀あり。人はバイブルの日本譯の、翻譯讀むに堪へざるを以て、及ばして、基督教徒の文學を評騰するの標準と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なすと雖も、彼等の文章は、バイブル翻譯時代よりも遙に進歩したり。彼等は現今の日本文聖書を以て滿足する能はざるものなり。然りと雖も聖書の翻譯たる、事頗大にして、敬虔審愼の念あるを要し、加ふるに莫大の資金を要す。されば今に當りては、之を如何ともする能はざるものあるなり。讃美歌の如きは、實に我邦今日の新躰詩の先聲を着けたるものにして、既に改正に加ふるに改正を以てしたると雖も、なほ之に滿足せざるを以て、日本基督教會派の如きは、數年前より、更に改正を加ふるとを企てつゝありと雖も、如何せん、資力に乏しくして、俄に着手し難き状態なりといふ。日本基督教徒の文學たるや、之を外歐米に比すれば、其及ばざるや遠しと雖も、我邦の文界にては、優等の地位に在りといひて不可なるとなし。さりながら彼等が現在の日本譯聖書よりも遙に優等なる聖書譯を成就し得て、其勢力のルーテル譯、もしくはジェームス王譯の十一をだにも得るとあるの日までは、未だ幼稚なりといふ境界を脱すると能はざるものなるべし。

◎萬朝報の賣れる理由

萬朝報の賣れ方のよき事は、日本現在の諸新聞紙中の第一に位し、日々十萬以上を發兌すと聞く。天龍川上流に在る一製紙會社の製紙を殆ど一手に引受け、其紙の原料たる樅樹を採伐するとの盛んなる、會社に近き山林は、既に數里の奥まで切り平げられたりといふ。萬朝報の賣行よきが爲に、山林濫伐となり從つて未來の洪水の原因とならんとするは驚くべき次第ならずや。抑も萬朝報が何故にかくも莫大の發賣高を有するかは、世人の多く考へ及ばざる邊に理由の存するものあるべし。一枚一錢といふ安直は殆ど他に類なき處なれども、一ヶ月廿五錢賣捌店にて廿二錢となれば、近時新聞取次の競爭より、中央、國民、毎日、報知等の廿二三錢迄、朝日の廿四五錢なるものあり、「やまと」の如きは本社の定價廿錢なりといへり。紙數よりいへば、今の萬朝必ずしも左程の安價には非ず。紙面記事の簡短に能く整へる、探報の行屆きて、人の皮肉を發くに吝ならざるなども賣れ行よき原因とはなれども、車夫馬丁まで之を愛讀するに至りては、彼等の必ずしも、其記事を解し得るが爲ににあらざるべし。其記する處の文字の割合に平易ならざれば、下流社會人間の讀み難き事多きなるべし。されば竊に考ふるに、萬朝報は、其記事の性質よりして普通在上に不平なる下流人民等は、之を見て勇肌らしく思ひ、其の新聞を手にすれば、何となく氣持よき思ひ、所謂江戸ッ子の氣に叶ふものあるなれば、これが爲に、他新聞にも優りて、之を愛讀する所以なるべしと思ふは如何に。加ふるに、定價の廉なると、思ひ切つた面白い記事の時々あるとなれば我邦にては驚くべき計りの賣高とはなりしなるべし。萬朝報は江戸ッ子的なり、故に江戸ッ子に愛讀せらる、同新聞社の主旨も地方を顧みにせずして、東京を以て最大得意とさせるなるべし。他新聞と雖も素より同樣なるべしと雖も、この主旨を以て勉強するとの彼に及ばざるものあるなり。

◎東京と大阪との文學の性質差異

大阪文壇が明治の世となりて、頓に以前の勢力を失ひたるとは、諸勢力の中央に吸收せられしと同原因なるべし。さりながら、德川時代にても、大阪と江戸との文學には、多少性質の差違せるものなり。江戸は近松、西鶴を出すと能はず、大阪の一九、三馬、馬琴、春水等を出す能はざりしは、兩地人情風俗の相違の來たりし自然の結果なり。現在にても、大阪文學には、それ相當の一種の風氣ありて、大阪人的にヒッツこく、ゴタ〳〵然たる、其地發兌の雜誌を見るに於て其感あり、また大阪は東京に比すれば、官民の制裁自然に寛なるの趣きあればにや、急激極端なる雜誌は、東京よりも多く發兌せられたり。自由燈、社會燈などいふ雜誌が、幾度か發行停止の厄命を受けながら、幾度か姿をかへて出でたる、また廿六世紀といへる雜誌が、迚も東京にては發行出來ぬ性質のものながら、數厄を經て、其宮内大臣論を掲ぐるまで命脉を繼ぎしなどあり。また江戸ッ子的なる萬朝報に模擬したると覺しき万歳新聞の、猥褻を弄して、卑陋醜汚に過ぎたるが如きは、大阪にては兎に角に、東京にては發行せられ得べしと思はれず。また東京の新聞には、講談物多く見ゆれども、大阪の新聞には見當らざるが如し。これまた東京人の勇ましきとを好むと、大阪人のやさしみを好むとの相違あればあるべし。大阪の淨瑠璃の、東京の義太夫となる丈に、兩地人民の嗜味の相違あるは、古へより文學性質の差違となりたるなるべし。

◎藤村の新躰詩

藤村の新躰詩に好評あり、其詩集の發行よきは、何が爲めか。其詩想に、高潮の

風韻あるか否めか。其文句の美麗なるが否めか。客あり語りて曰く、露村の詩は、想に閃へ、情を狀ふが故に、評判よく、發行よしさ、果して然るか。中無の非、士人の口に上り、生殖を說きたる書類に莫大なる賣高あり、小說に裸体畫の挿畫あるによりて賣れる世の中にては、客の言、或は多少の道理となしもせず。

◎湼氏英文法摘要　大谷鐵江譯著　中學書院出版

學のものたるや、人にありて書にあらず。文法はなほ兵法の如し、之を文字に修飾して、よく學者に傳へ得べしさ思ふは誤りなり。須らく其教授者たるものゝ才幹氣力によらざるべからず。されど、今人茲に見る能はず、みだりに文書の乏しきを憂ひしきりに之を出す。愚といふべき乎、チスフヰールド氏著すところの文法書四種あり、其二種既に譯せられ、今また斯書によりて一を加へ、まさに三種をなす。其表面道理を重んずるが如くして、其實、實用に走ること盛んにかの典高優麗のクラシツクスを捨てゝ、所謂野卑なる實用英語なるものを重じさし、中學校之を取り文部の檢定試驗之を取る、國民の理屈がましきホヰツトニー、ベイン等を避けて、このインデツキス然たる湼氏文法書を迎ふるに急なること、決して所以なきに非ず。その高等なる二卷い、或は翻刻せられ或は譯述せられたるに當り、中學初年をあてこみ、中學書院が大學生大谷氏をして斯書を出さしめたる、識し得さいふべきか。然れども、その譯述の法に新機軸あるに非ず、依然として難解の辭句多く。「原級」「比較級」「最高級」などの文字あり、その「級」の真意を解するもの、百人中恐らく、一二なからん。また「動詞を變化する」或は「曲げる」さいふは、其主要なる部分を示すなりといふが(一一四頁)等の句あり。これらのことや、たゞにこの書のみならず、凡ての邦文英文法書の通弊にして、私に慨みとする所なり。故に思ふ、文法の教授は今日の譯書によりてすることを難し、須らく教師の懇篤なる講義(レクチュア)になるべしさ。されど若し自修研學の志篤き人に寄せん。さならば、すでに或る人の言ひけん如く、術語の凡て名詞なるものは、之に譯語を附せず、更に一新機軸を出して其全文を文語一致体にし、綿密丁寧なること慈母の其子に食を與ふる如くにし、よく／＼嚙み碎て之を味はしむるの途を取るべし、これ今日に要する初學の美文法書なるべけむ。されど、人は書文の主なり。もし教師にして其人あらば、敢てチスフヰールドを煩はすに及ばず、スウヰントン、ヒチオ、或はカツクケンボスの一卷、なほよく學者をして、英文法の極意に格致するに至らしめんか。古きペリーの一卷は、よく田口卯吉氏をして奇拔なる經濟論を吐かしむるものを。

◎日の出しま　村井弦齋著　春陽堂版

新高の卷

此は紫希女史一隊の探險船を艤ふし、お花夫人の父を蕃地に索むるの條にて、照子まさに胡土に嫁せんとする悲劇開幕の端にて了る。絃齋の作。人の性格を敍するに鮮やかならねど、事を追ひ、理を辯ずるに於て、累々要領あり。就中、其の解釋は、平坦の裏に奇曲を匿くし、輕々筆を下し去つて深き點心の用意を潜む。此卷にふさ其の抱負を洩して云く、

全體何事でも此通りだな、下手な者は無用な處へ力を使つて更に其肝腎に中らんから、費やした力が役に立んのだ、按摩の上手なものは反り筋を柔らかに強く押すから能く利いて筋も弛んで來る、劍術の上手に使ふ者は竹刀を柔かに持つて打込む時に力が入る、文章を書く者も一篇の眼目へ力を入れて其外を輕く序すれば要點が人の心に印映するけれども、近頃の文學界は頭も尻も分らんものが流行する、畫を描いても下手な者は隅から隅へ万遍なく力を入れて肝腎の點睛さも云ふべき所を閑却するから更に其畫が引立ん、下手な政治家は法令の末に計り力を込めて国家の大本を忘れて了ふ。

◎累卵の東洋　大橋乙羽著　東京堂版

是れ乙羽子昔し硯友社にありける比の著者なるが、圖らざりき此の慷慨激越の經世談を聞かんとは。其燃の志士「智度」紗上に書して曰く、印度可レ憐支可レ憐、二億黄生皆舐犢さ。筆を此の感慨に起して、破牢蜀を述れ、遂に日本壯士さ會見するに至り忽然筆を收む。余頗長し。正に是れ「佳人之奇遇」に彷彿たるもの。頗よる乙羽子の才筆を發揮す。

◎桑港日本新聞　（桑港ゴテンゲートア　ベコカ、百二十六）

近頃ろ桑港日本新聞第三卷第四百二十七號を見る、中に桑港日本字新聞雜誌の沿

事を記して其名を列擧すらく、
しのゝめ新聞　新日本　十九世紀　濤瀬舟　桑港通報　鍛命新聞　自由　青道
征革命雙民　金門日報　桑港新聞　桑港新報　新紀元　桑港評論　新世界　愛
國　東洋　北米通信　ドやぱんへらるど　即ち本紙桑港日本新聞なり　桑港時
事　腰ぼづし　太平洋。

◎俳諧木太刀　　竹冷撰　　春陽堂版

竹冷、洒竹、紅葉、殘花、知十、小波、烏黒等の諸人の組織せる秋聲會員の句中より、竹冷が、もの〻すさびに撰び出されたる句集を、俳諧木太刀とは、ぞ附けける、

◎少年讀本第一編高島秋帆　　福池櫻痴居士著　　博文館版

博文館今度少年讀本なるものをつぎ〳〵に出版するの企てあり、其第一編として は、福池櫻痴居士の「高島秋帆」出でたり。火技中興洋兵開祖と呼ばれたる秋帆先生の事を記するに、親しく故人を識りて、且つ幕末史に通ずる櫻痴氏の筆を傚ひたるをなれば、小傳記物として、有益なる著書なりといふべし。さりながら、少年の讀み本としては、やゝ難きに過ぎて、解し難き處多かるべきやに思はる。

◎女界文壇雜俎　（本號〆切まで）

◎女神管（天說居士）
◎料理叢談（知十）
◎優美の趣味
◎我邦女界の香聞
◎家族相互の愛
◎女students?

◎女權と親族法（磯部鎮州）
◎日本の家庭組織（内村鑑三）
◎音樂の有益き社會（田川生）
◎女性の君主を論す
◎武家時代の家庭
◎尼僧教育の尼僧の高原ハ敬報。尼僧の上で。
尼僧叢林規則
◎多妻と偉人。大黒は女体[illegible]摩利支天とは女性同胎。

日本連載
毎日新聞連載
[illegible]新聞十一月卅日
[illegible]新聞十一月十九日
[illegible]雜誌第[illegible]九號
女子の友第[illegible]二號
[illegible]雜誌第七百九十三號
[illegible]新聞十一月廿三日
[illegible]人第七十七號
[illegible]雜誌第[illegible]八號
尼僧の[illegible]
白蓮第八號

ますらをはなをしたつべし後の世に　　大伴家持
きゝつぐひともかたりつぐがね

片々

◎高等女學校令　先般開會せられし高等教育會議に諮詢せられたる文部省提出の高等女學校令決案は左の如し。

高等女學校令

第一條　高等女學校は女子に須要なる高等普通教育を施す所とす
第二條　北海道及各府縣に於ては高等女學校を設置すべし
前項の校數は土地の情況に應し地方長官に於て文部大臣の指揮を受け之を定む
第三條　前條の高等女學校の經費は北海道及沖繩縣を除くの外府縣税若くは地方税の負擔とす
第四條　郡市町村又は町村學校組合（北海道及沖繩縣に於ては區）は土地の情況に依り須要にして其區域內小學教育の施設上妨なき場合に限り高等女學校を設置することを得
第五條　郡市町村立の高等女學校にして府縣立高等女學校に代用するに足るべきものあるときは地方長官に於て文部大臣の許可を受け府縣税若くは地方税を以て相當の補助を與へ第二條の設置に代ふることを得
第六條　私人は本令の規定に依り高等女學校を設置することを得
第七條　高等女學校の設置廢止は文部大臣の許可を受くべし
高等女學校の設置廢止に關する規則は文部大臣之を定む
第八條　公立高等女學校の位置は文部大臣の認可を經て地方長官之を定む
第九條　高等女學校に技藝專修科を置くことを得
第十條　高等女學校の修業年限は四箇年とす但土地の情況に依り一箇年を伸縮することを得
高等女學校に於ては生徒卒業の後尙二箇年以內其學業を補習せしむることを得
第十一條　高等女學校に入學すべき者は高等小學校第二學年の課程を卒りたる者若くは之と同等の學力を有する者たるべし
第十二條　高等女學校の學科及其程度に關する規則は文部大臣之を定む
第十三條　高等女學校の教科書は學校長に於て文部大臣の檢定したるものに就き地方長官の認可を經て之を定む但檢定したる教科書を使用すること能はざる事情あるときは地方長官は文部大臣の認可を經て一時他の教科書を使用せしむることを得
高等女學校教科書の檢定に關する規則は文部大臣之を定む
第十四條　高等女學校の教員は文部大臣の授與したる教員免許狀を有する者たる

べし但文部大臣の定むる所により本文の免許狀を有せざる者を以て之に充つることを得

高等女學校教員の免許に關する規則は文部大臣之を定む

第十五條　公立高等女學校職員の俸給旅費其他諸給與に關する規則は地方長官に於て文部大臣の認可を經て之を定む

第十六條　高等女學校の編制及設備に關する規則は文部大臣之を定む

第十七條　公立高等女學校に於ては授業料を徴收すべし但特別の場合に於て之を減免することを得

授業料入學料等に關する規則は公立學校に在りては地方長官に於て私立學校に在りては設立者に於て文部大臣の認可を經て之を定む

第十八條　本令の規定に依らざる學校は高等女學校と稱することを得ず

第十九條　本令を施行するが爲に必要なる規則は文部大臣之を定む

附　則

第二十條　本令は明治三十二年四月一日より施行す

地方長官は文部大臣の認可を受け本令施行の日より[illegible]年以内第[illegible]條の規定を延期することを得

此高等[illegible]は二月十九日[illegible]に[illegible]、[illegible]ただ女教員を設くることを得といへる條件を[illegible]のみにて、[illegible]に可決し、次で高等女學校學科及程度に關する規則に移[illegible]が、是[illegible]の[illegible]指名にて、[illegible]官末吉、[illegible]河原[illegible]其[illegible]

同[illegible]府[illegible]以上の高等女學校令は[illegible]其[illegible]を有する者に[illegible]市町村立に[illegible]

[illegible]京都、大阪、奈良、[illegible]長野、和歌山、[illegible]石川、岩手、島根、宮城、山形、[illegible]、山口、愛媛、山[illegible]の[illegible]十六縣にして、[illegible]設置を要すべきは、神奈川、埼玉、群馬、[illegible]縣なりといふ。

○[illegible]界　高尚の音樂として[illegible]一[illegible]

[illegible]に比して、[illegible]に[illegible]み一[illegible]

[illegible]の[illegible]一[illegible]、[illegible]

[illegible]一[illegible]にて、[illegible]

[illegible]曲を[illegible]する者多[illegible]、[illegible]出[illegible]

[illegible]てらるべき大[illegible]の[illegible]を[illegible]る名[illegible]子なる者[illegible]出して、

[illegible]は[illegible]一月の[illegible]授[illegible]を[illegible]へ各自[illegible]、[illegible]を[illegible]として、教授の[illegible]め

に[illegible]加し、下[illegible]界の者も[illegible]相[illegible]き[illegible]しへき道は開かれ、我も／＼

も入門する者多く此[illegible]は[illegible]に[illegible]代も來せし如くに[illegible]

（國民新聞）

（三）二日四百哩の自轉車乘り婦人　米國オハヨー州トレドー市のパートレーと云ふ婦人は本年十八九歳の妙齡なるが、自轉車乘りの名人にして、先頃四十八時間に四百哩を走る可き約束を以て出發せしに、四十六時間五十分間にて四百四哩を走りたり、之と比肩し得べきものはオハヨー州に於て男子に二名ありたれども、婦人にては米國中未だ其例を見ずとて、此事を聞くもの皆其迅速なるに一驚を喫したりと云ふ。

○一町内五名の高齢者　東京の日本橋に名高き、目出度尽砂町の一町内に八十九才の老婆を首めとして五人の高齢者ありといふ。

○女學雜誌第四百七十三號　女子教育の重んずべきは固より論を待たざる所、然して之を實行せんとするに於ては、家庭の教育より始めざるべからず。家庭教育其の當を得ざれば其他の點に於て、縱令熱中するとも其完美なる良母善妻を造くる點に於て効力は少なかるべし、今號は女學雜誌記者の最も力を茲に盡すを喜ぶ。（紀伊毎日新聞十月十三日）

○婦人自殺倶樂部　二三年前、米國に初め自殺倶樂部てふものありしが、政府の爲に解散を命ぜられしに、今より六ヶ月以前、別に婦人自殺倶樂部てふもの起り、抽籤を以て自殺者を定め、毎月一人づゝ自殺する組織なるが、七月十五日に死せし少女は、ベンレー、ヌンバーと呼ぶ少女にして、炭酸を呑みて死せりと云ふ。

○乞食の富豪　伊太利に、トーリーとて名高き乞食ありしが、昨年中頓死したるに、其[illegible]は、銀行の通帳、公債證書、金銀貨等、數多に發見せられて、其總額二百萬リラ（八十萬圓）に上りたりと云ふ。西洋には、此類少からず。千八百九十五年、伊國のオーセーロと云へる所にて死したる乞食は、皮袋の内に百萬フラン（四十萬圓）を藏し、千七百九十年の古[illegible]酒四百本を蓄へ居たり。同年巴里のセーヴル街に於て死したるマリー　ヂユーフオールと云へる乞食も亦、三萬フラン（一萬二千圓）の預金を有し、年々五百三十フラン（二百十二圓）の收入ある公債證書の所有者たりきと。又千八百九十二年アヴインニヨンに死したるマルセツンと云へる乞食には、五十萬フラン（二十萬圓）の遺産を有して、其遺産を、市と[illegible]に分配せられんことを遺言し置きたりと云ふ。尚、今に生存する乞食にして、財產を有するものは、千八百九十三年僞證罪を以て重懲役七年に處せられたる[illegible]のシーモンヤツパシツリと云へるものなるが、同人は手なくしか、足なりしか、其頭にかなり生ながらにして有せざりしより、人の同情を受くること深く、爲に貰ひも多くして、千八百八十年には、四十七歳にして、三十萬フラン（十二万圓）の貯金を作り、千八百八十八年は、投機事業にて之を六十二万五千フラン（百廿五万圓）に殖し、別にトゥーストト及びパレンツオに、凡そ百万フラン（四十万圓）ばかりの[illegible]を購ひ、其後相變らず、相場にて財產を增殖し居るといふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時報

◎故與風女學校長山田時章氏　東京神田駿河臺なる與風女學校の創立者として女子教育に尠からぬ功勞ありし山田時章氏は、去月廿一日病氣にて卒去せり。氏は天保五年十月四日京都粟田口に生る、初の名は勘解由、幼より氣概ありて幕府の忌憚に觸れ獄に下りしことあり、當時の逸話として傳へらるゝは江戸に押送せられて吳服橋内の白洲に出で、時、不圖役所に於て夫の梅田源次郎に出合ひたるに、梅田は目もて氏を招き耳に口を寄せてさゝやけるやう「予は年齒猶弱冠たり丈夫の風色是より揚らん、宜しく今より大阿呆然として法廷を弄び刑を免るゝを得て、再び世間に還り王政中興の長計を謀せざるべからず。雲濱の如きは嫌疑家の大本地として幕府に睨まれ居れば詮なきなり」と氏大に感悟して、遂に大阿呆の假面を被り、以て刑罰を逃れたるは安政六年なりき。後梅田の姪に當る富女といふを娶りしが、富女また梅田の薰陶によりて頗る烈女の譽あり、内助の効少ならず。明治島津久光等に謀りて青蓮院宮の爲に盡策し、其他王政維新に與りて力あり。明治二年堺縣大參事となり治績大に擧る。氏堺縣大參事の後太政官の諸局に歷任し、別に大政類典大政提要等三千卷餘の著述ありしが、明治六年火災に罹りて積年辛苦せし稿を悉く烏有に歸し、是より歷世の無常迅速を觀じて官を辭し、初めて女子教育の事に從事するに至れり。二十五年正六位に叙せられ、今年特に位一級を進めて、正五位に叙せられしが、十月廿一日遂に病歿す。遺骨は染井の塋域に神葬せり。(讀賣新聞)

◎横濱の慈善音樂會　十月廿三日横濱會館に於て同地の婦人慈善會の孤兒撩星園、北海道水害、慈善病院の爲め催ほしたる慈善音樂會は來會者約千餘名にて非常の盛會なりしと云ふ。

◎正行舍　女子家庭教育の忽せにすべからざるは勿論なれど父兄日常の業務に忙殺せられて知らず識らず監督を怠り爲めに、女子の家庭教育を忽せにするものあるを遺憾とし、此等の父兄に代りて女子家庭教育の監督の責に任じ、將來淑德の女子を養成せんとの目的を以て、起りたる牛込區下宮比町十番地の正行舍は、舍主に木原米子、補助として中島秋子、伊庭想太郎の兩氏ありといふ。

◎札幌の高等女學校　札幌には一の北星女學校あるのみ、久しく高等女學校設置の計畫ありて未だ果さず、近頃小學校の女子部を増設し新に八千八百圓の校舍を建築して、暫らく高等女學校の欠を補はん計畫中なりとて。

◎東京女學館祝賀式　麹町區虎の門内なる同館は創立以來滿十ヶ年となりたるに付き去月廿九日(土曜)午後二時より祝賀式を執行したり。

◎淑風奬勵會秋季大集會　十月十六日午前九時より小松花園町萬花園に於て小松婦人淑風奬勵會の秋季大集會を開催したりといふ。

◎信州諏訪郡裁縫講習會卒業證書授與式　十月廿四日信州諏訪郡役所樓上に於て、同郡裁縫講習會卒業證書授與式を執行したり。完了證書を受けたるもの四十五名、終業證書を受けたるもの　名なりといふ。

◎靜岡縣大宮町矯風會　は去月廿一日同町此花坐に於て一大演說會を開會したり。聽衆は六七百名、同會は婦人會員を募集し時に矯風演說を開會して、全町風俗の頽破を改良する目的の由。

◎女學新報の發刊　東京芝區白金猿町頌榮女學校に關係ある人々の執筆に成れる女學報は十月を以て其一號を發刊したりといふ。

◎孝貞を賞す。島根縣八鹿郡木庄村大字木社町の石橋加左衛門の妻イワ畹に其孝女ハンの孝貞を賞して木庄大社教會員九名は各充分の出金を爲し、總額一圓七十錢を贈りたりといふ。

◎博徒の改心と美擧　三州寶飯郡豐秋村大字平井の原田常吉と云へるは遠近に聞えし博徒の親分株なりしも、近ころ大いに感ずる事ありて博徒の群にあるを恥ぢ、一切斷じて教育及び工共事業に心を委ね、頃日も居村なる豐秋第二尋常小學校へ、價三拾圓のオールガンを寄附し、尚同郡伊奈村高等小學校へ木銃百挺を寄附したり。(新愛知)

◎美談一束　孝女荒木さよ　東京芝區愛宕下町三丁目一番地佐賀縣士族荒木さくの孫女さよ(十六)内外新聞十月廿八日◎奇特なる人　福井市浜中町十六番地淺野源七(新福井十月十九日)◎至孝なる娘　滋賀縣東淺井郡大郷村大字八木濱の西川忠兵衛長女ゆき(廿七)近江日報十月廿五日)◎この特志の人あり。廣島縣豐田郡東生口村字原の高橋浦次郎(藝備日々新聞十月廿六日)◎病母と孝子　福井市元上油町四十六番地住金物商志比甚五郎(若越自由新聞十月廿二日)◎可憐なる孝子　東京府荏原郡大井村大字倉田三千四百五十六番地田村熊藏の次男福藏(十四)(内外新聞十月廿五日)◎少女小車を曳て病兒を入湯せしむ　青森縣三戸郡南方村字寺島小野寺万次郎ノ妹玉の(十六)(陸奥日報十月廿二日)◎殊勝なる三兄弟　尾州知田郡奧田村大矢正胤の三男(新愛知十月廿二日)

◎生徒褒賞　富山縣高岡中學校生徒高井治一、今より八年前父を亡ひ追窮家せず、肖像を揭げ朝夕酒饌を供へ出入必ず告げ、又母の病めるが爲め幼少の身を以て家計に任じ、勤儉六千餘圓の資產を興し、近隣嘆稱せざるなし、乃ち同校講堂に於て賞品授與式を行ふ。

◎孝子　讃岐國野田郡一谷村の片山利作は養父母に孝順なる廉を以て、此程知事より金十圓を賞與せらる。

◎奇特少女　仙臺市高等小學校二年生森まつ歸宅の途中一乞食の嬰兒を棄去らん

とするを見、故を問ふて嬰兒の母は、産後行方不明となり、辛うじて哺子の乳飲器を求めしも、貧窮の爲めに破毀され、已むなく嬰兒を棄てんとするを知り、涙を掩ふて家に歸り父母に乞ふて乳飲器を購ひ之を與ふ。

◎仙臺婦人談會　仙臺市東一番丁本願寺別院にては過般小野島行薫師赴任後熱心に布教講究中なるが、明廿四日より三日間教區内六郡下の末寺總代を召集し、會議を開き教學振起の方法を討議し、且つ又該院樓上に着手する[illegible]其教方法の一なる婦人教會は先月毎月第十七日午後一時より、同書院に開會の上眞俗二諦の教義は更なり家庭教育家事經濟等に至る迄、懇切に演説するより隨意加入の者も不尠に付き、今回規則を頒布し、來年一月を以て有志信徒の會同を開き、該會の擴張を計ると云ふ

◎貞女追賞　甲州東山梨郡岡部村飯田竹一郎亡妻たけは生前貞節を以て聞えしに三年前死去したるが、此程同縣知事之を傳へ聞きて、左の如くに追賞したり。

東山梨郡岡部村
故　飯田たけ

資性[illegible]貞實にし　婚嫁以來夫に事へ貞操舅姑に對し孝養怠りなく、能く家業に[illegible]し兒子を保育し家産を支持する十七年一日の如し洵に奇特とす仍て爲其追賞金二圓下賜候事

明治卅一年九月十一日

◎朝鮮の女子の[illegible]　[illegible]にては[illegible]一般に[illegible]女子すらも其父兄に從ふて[illegible]すに至れり[illegible]十一日の事なるが女子教育組合員自名[illegible]の建白書を[illegible]女子の爲めに學校を設立す可しと云ふに在り[illegible]之に[illegible]する[illegible]甚く[illegible]なきにも、[illegible]又[illegible]一般[illegible]は[illegible]ありといふ。

[illegible]

にして緋降の七子紋之れに次ぐ裏地の贅澤は限りなし◎婦人吾妻コートは襟幅狹く胸の開き少しく襴き仕立の流行にして地質は黒耕紋紹縮緬茶は變化なしと云ふ昨今の仕立小賣相場一組

袴尼服	三十圓より四十圓
フロックコート	廿七圓より卅五圓
モーニングコート	二十圓より三十圓
背廣	十五圓より廿五圓
オバーコート	十六圓より廿五圓
長外套	四十圓より百圓迄
鳶合羽	二十圓より五十圓
吾妻コート	十六圓より廿五圓

（日本新聞）

◎日本赤十字社第九回總會　は十月廿八日を以て上野鶯博覽會場第五號館に於て開き、次いで上野公園近に於て演習執行。皇后陛下の御臨啓ありたり。婦人共立育兒會　は明治廿三年、東京婦人社會の設置に成り、貧者の病兒を救療するを以て目的とせり。現今會員合計三千七百五十余名ありといふ。

女性の君主　　　　　　　（日本人）

日本人記者、女帝政權に就きて女性君主論をなすの要は、女主の温顏なるものにありては至重を以て稱すべく謙徳周匝にして夙々の明あり能く至徹を育ちて怠り、事を處するに當て、また學に學ふよとなれる、されど猜疑の念あるが爲に、殘念なる[illegible]出で、また進用するや小人多く、婦女間に於て政柄を私ふとさい、小民を[illegible]て、大弊を醸するもありなどいふに在り。

[illegible]いるあぐりの野菜あはれにて
利かまどる手めだゆたひにけり

Digitized by Google　　　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎緊急廣告

地方難患者を救助せんとする**高僧各位**及ひ請賣希望の諸君は金五圓以上五圓を增す每に漸次割引あり御送金の上至急御申込あれ本舖は相當の法を以て一時施藥若くは特別割引の上將來永遠に御家将と相成候樣御相談に應ず

● 速康散服用後 子宮病の患絶てなし

謹呈偖昨年八月愚妻子宮病に罹り貴家御製藥速康散三廻り分御注文仕 直に服藥爲致候處其實効追々顯れ其後子宮病の患絶て無之今に至り本人は元より家内中に至るまで速康散の大妙藥なることを申出大幸福を得たりとて悦び居候右に付他の患者へも拙方實驗せし旨語りしに此度近傍に於て血の道患者二名有之其速康散なる妙藥請求の義小生へ依賴され候依て右速康散三廻り分二包み二個即ち六廻り代價郵稅共金貳圓拾六錢郵便小爲替を以て差送り申候間此狀着次第至急御送藥被成下度候右延引ながら御禮及御注文旁愚筆を捧げ候 頓首

山口縣吉敷郡西岐波村字請川
宇多川正一

久保田庄左衛門殿

● リウマチス病に神効顯はる

拜啓貴舖御發賣の速康散過般購求仕リウマチにて困難の愚兒へ服用爲致候處追々其神功顯はれ同人は勿論家内一統大いに喜悅仕候就ては今回尚二廻り分御郵送奉願度右御禮旁御依賴まで草々敬具

北海道釧路國白糠郡鹿路村
七田熊太郎

● 如此實驗諸君の禮狀山の如し

● 此速康散はこれまでありふれた世間普通の藥と違ひ脹滿脚氣子宮病血の道リウマチス等既に數年來難治の難病を全治ならしめたること數千人其實は本家に來り患者諸君より送付せられたる謝狀を見られ尚ほ疑ふ人は先方へ照會せられよ藥價は二日分拾五錢一廻五十錢十五日分壹圓參拾五日分貳圓六十日分參圓で名高い藥店に皆有ます遠國の注文は六十日分までの賃百里まで八錢百里外十六錢で小包郵便にて直ぐ送ります

○近頃にせ物あり本家久保田名義と雲形に久の字の商標に御注意下さるべく候

速康散本家
京都市西洞院通五條南入町
久保田庄左衛門
電話六百拾九番

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日逓信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY